
魔法少女リリカルなのは～転生者の軌跡～

ファンタジア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜転生者の軌跡〜

【Nコード】

N8590P

【作者名】

ファンタジア

【あらすじ】

俺は、真っ白な空間を漂っていた。

そして、目の前に現れた女神。

女神から告げられ真実。

「俺が死んだだって！？そんなの認めるか！」

順次修正して行きます。

魔法少女リリカルなのは

目を覚ますと、俺は真っ白な空間を漂っていた。

そして、俺の前に現れた女神アテネ、アテネに知らされた真実。

真実を受け入れる事で得た力、そして、アテネから、与えられた新たな命。

俺が新たに命を得て、どのような人生を歩むのか。

この物語は、絶対的な力を使い運命を変えて行く転生者の軌跡です。この作品を書いているファンタジアです、前作を消して新作を書いています。

前作は、諸事情により、削除させてもらいました、申し訳ございません。

転生者誕生（修正）（前書き）

修正しました。

転生者誕生（修正）

「うう、此処は？」

俺が目を覚ますと、そこは真っ白な空間だった、そこに俺は漂っていた。

「此処は何処だ？俺は何故こんな所に居るんだ？」

自分が何故こんな所に居るのか解らず困り果てていると。

「教えて上げましょうか？」

「誰だ?!」

俺が振り返ると、そこには青い髪の女性が居た。

「初めまして、神崎 光一くん、私は此処の管理をしている、女神アテネよ」

「へ？女神アテネって、あの有名な女神アテネ？」

「そうそう、そのアテネよ、宜しくね」

「……………え」と、信じろと？」

「アレ、信じて無い？」

アテネが俺に問い掛けると、俺は頷いた、だっていきなり神様だっ

て言われても信じろって言う方が無理だ。

「なら、証拠を見せて上げる」

「証拠？」

「そう、証拠」

アテネがそう言つと、アテネがいきなり増えた。

「増えた！？」

「どう、信じる気になった？」

「……………ああ、信じるよ」

だつてなあ、いきなり同じ人間が増えたら信じるしか無いだろ？

「じゃあ、話を戻すけど、この場所はね、死人の魂を導く場所なの」

「へ？死人の魂を導く場所？じゃあ、何で俺がそんな場所に居るんだ？」

「えっ？本当に、本当に分からないの！？本当は解ってるんじゃない！？」

アテネが信じらんない様な顔をして聞いて来た。

「いや、本当に分からないんだけど……」

「じゃあ、説明してあげる、単刀直入に言うわね、あなたは……
……死んだの」

「えっ、死んだ？俺が？あはは……冗談キツイって」

「……………」

「……本当なのか？」

「ええ、本当よ」

「なんで、俺が？」

俺がアテネに死んだ理由を聞くと、アテネは辛そうな顔をしていた。

「お願いが有るの」

「お願い？」

「理由を聞いても取り乱さないって」

何だよ取り乱すって。

「……………分かった、取り乱さないから教えてくれ」

「実はね、あなたが死んだのは偶然なの」

「偶然？」

「そう偶然、あなたは学校の帰りに通り魔に襲われて、殺されてし

まったの、只そこを通ったってだけで」

「!？」

俺がアテネに聞かされた真実に言葉を失った。

「偶然だつて!？俺はそんな事で殺されたのか!？」

俺は怒りを露わにした。

「何でだよ、ふざけるな!何でそんな理不尽な理由で殺されなきゃいけないんだよ!殺してやる、俺を殺した奴を殺してやる」

「止めなさい!そんな事しても、あなたの命は還らないのが解らないの?」

アテネが俺を止めようとしたが。

「うるさい!お前は関係無いだろ、ほつといてくれ!」

俺がアテネに向かってキツイ言葉を投げかけると。

「!？」

アテネは涙を流していた。

「お願い、そんな悲しい事言わないで」

「何であんたが泣いてんだよ!」

「そんなの悲しいじゃない、あなたまで、あなたを殺した人と同じ道を歩いて欲しく無いの」

しばらくして、アテネは泣き止んだ。

「解ったよ、止めるよ、そんな事しても意味無いもんな」

しばらく時間を置く事で冷静になっていた。

その時、俺の体に異変が起きた。

「うっ、体が熱い！」

急に体が熱くなり始めたのだ、まるで体の奥から、焼く様な。

「まさか！そんな事が？」

アテネが信じられ無い様な顔になる。

「アテネこれは、何なんだ？」

「落ち着いて、すぐに治まるから」

アテネがそう言っと、確かに治まり始めた。

「ハアハア、何なんだ今のは、アテネ教えてくれるか？」

俺がアテネに体の異変について聞くと。

「いいは、教えて上げる、今は力の覚醒なの」

「力の覚醒？」

「そう力の覚醒、あなたは力を手に入れたの、別世界に転生する為に」

「別世界への転生？」

さつきから訳の分からない言葉が出てきて頭がこんがらがって来た。

「なあ、さつきから言っている力だの別世界って何なんだ？」

俺はアテネに説明を求めると。

「ごめんなさい、そうね説明するは、まず力の覚醒って言うのは特殊な力と思って貰えば良いわ」

「特殊な力？」

「そう特殊な力、例えば時間を操るとか、まあそんな感じかしら」

「それは凄いな」

俺が素直に驚いていると、アテネは次の説明に入った。

「次に、別世界は【似ていて似ていない】世界かしら」

「似ていて似ていない世界？」

俺はイマイチ分からなかった為、もつと詳しく聞いた。

「詳しく言えば、光一が居ない世界とか光一が女の子になっている世界の事、世界は可能性に満ち溢れているのだから、もしかしたら【有ったかもしれない】世界、これが別世界なの、別の言葉で言えば平行世界の事ね」

「それは、本当なのか!？」

俺は驚いた、まさかそんな世界が有るなんて知らなかったからだ。

「これで分かって貰えたかしら」

アテネが確認してくる。

「ああ、分かった」

「じゃあ、俺は別世界に行くのか」

「行く訳じゃ無いは、転生するのよ」

「……………転生」

「おめでと、あなたは又人生を謳歌出来るのよ」

俺はアテネが祝福してくれた事が嬉しく。

「ありがとうアテネ、俺もう一度頑張ってみるよ」

「ええ、だから頑張ってね、応援してるは」

アテネがそう言うと、俺の体が透けだした。

そして意識が途切れた。

「……………私は最低ね」

アテネは辛そうな顔しながら有る場所を見ていた。

ソコには黒い塊が浮いていた。

転生者の詳細（前書き）

主人公の詳細を、記載するぜー

転生者の詳細

作者「では、今から、この作品の主人公こと、神崎 光一のステータスを公開するぜー！」

光一「おっ、公開するのか」

作者「ではでは、始めます、どうぞー！」

主人公

名前：神崎 光一

性別：男

年齢：16 ↓ 5

性格：積極的で、何でも首を突っ込みたがる、大事な人が傷つく事を、何より嫌がる。

容姿：10人いたら10人振り返る美形

能力

魔力：無印、A's時SSSS

レアスキル

刻の逆行：森羅万象の全ての時間を巻き戻す

有限と無限：全ての物事の数や量、距離などを決められる

作者「こんな感じかな？」

光一「凄いチートだな」

作者「まゝね、まだまだチート能力増やして行く予定だから」

光一「まだ増やすのかよ！」

作者「これから、どんどん増やして行くので、宜しく」

幼なじみ（修正）（前書き）

修正しました。

幼なじみ（修正）

「おぎゃーおぎゃー」

お久し振りです、新たなに人生を始めた神崎 光一です、只今赤ちやんをやっています、まさか赤ちゃんの頃から、意識がはつきりしてい為排泄物なんか垂れ流しだしオムツを変えられたりと、最早拷問以外の何物でもありません。

「うーあーあ」（お母さん、そんな目で俺の大切な場所を見ないでって何度言えば分かるんですか）

そんな日々を過ごしている内に、3年が過ぎました。

「お母さん、今日も公園に、行ってくるね」

「あら、今日も行くの？この所毎日ね」

この人は俺の母親の神崎 早苗、まだ25歳の若々しい母親だと言うより若する、まだ10代後半でも通じるよ。

ついでに父親の名前は神崎 一、歳は28と父親の方も若い、仕事の方はかなり小さな会社の経営をしているそうだ。

そんな家族の元で暮らしていた俺だが、つい最近友達ができた、相手は翠屋と言う喫茶店の末っ子で高町 なのは。

「なのはちゃんが、待ってるから」

俺がなのはと出会ったのは、3ヶ月に初めて公園に行った時、なのはが転けて泣いていたのを助けて以来懐かれた。

「本当に、仲が良いのね」

「うん、だから行つて来ます」

「行つてらっしゃい」

俺が公園に行くと、そこにはなのはが泣いていた。

（なんで泣いてんだ？）

俺は何故なのはが泣いているのか疑問に思い、早歩きでなのはの所に向かった。

「なのはちゃん何で泣いてるの？」

「ぐずつ、光くん？あのね光くんが遅かったからもしかしたら光くんが来ないんじゃないかと思ったたら悲しくなったの」

光一は公園にある時計を確認したが。

（いや、遅かったって、まだ時間来てないぞ！？）

「えーと、なのはちゃん、まだ、時間来てないけど？」

俺がなのはに恐る恐る聞くと。

「でも、光くとすぐ会いたかったの！」

なのははそう言って又鳴き始めた、なので俺はなのはを抱きしめ頭を撫でながら。

「ゴメンね、僕が悪かったから許してくれる？」

「許して上げるの／＼／＼」

（俯いてどうしたんだ？それに、顔真っ赤だし）

光一がそんな事を考えていると。

「光くん、光くん、早く遊ぶの」

なのはは元気一杯に遊ぼうと言って来た。

「うん、じゃあ遊ぼうか、何して遊ぶ？」

俺が何して遊ぶか聞くと。

「おままごとで遊ぶの！」

（おままごとか、なのはもやっぱり女の子何だな）

俺が微笑ましいなと思っていると。

「配役を決めるの、光くんが夫なのはが妻なの、状況は光くんなのはの子供が出来て名前を決める所からなの」

（全然微笑ましく無い、妙にリアルだし）

「なのはちゃん？おままごとに状況とか必要なのかな？」

俺がなのはに確認すると。

「必要なの！」

どうやら必要らしい。

「そ、そう？わ、分かった、じゃあ遊ぼうか」

俺がなのはの勢いに押されながら答え、なのはとのおままごとを楽しみ（？）帰る時間を迎えた、え？おままごと恥ずかしく無いのか？俺は2歳まで赤ちゃんプレイやってたんだぜ、羞恥心何てもう捨てたよ、あれ、目から汗が出てくる。

「じゃあね、なのはちゃん」

そう言つて俺は帰ろうとすると、なのはが俺の服の裾を掴んでいた。

「なのはちゃん？服離してくれないと、帰れないよ？」

「ぐずっ、離れたくないの」

「ふう、なのはちゃん指きりしようか？」

「指きり？」

「そう指きり、又明日会えますようにって」

そう言って俺は指を出した。

「す、するの！指きりするの！」

なのはは、指を出し指と指を結んだ。

「じゃあ、初めるよ」

「「指きりげんまん、嘘ついたらまっ…千本飲ーまーす♪」」

（こいつ、今万本って言わなかったか？）

なのははに恐怖を感じながら、二人は家路についた。

光一は茜色に染まる空を見ながら、考えていた。

（これからもなのはと、こんな平和な日常を過ごせたら良いな）

光一は、そんな願いを空に願うのだった。

だが、そんな些細な願いも、叶う事は無いのだった。

番外編「誓い」(前書き)

番外編投稿します

番外編「誓い」

俺が転生してから5年が経った。

俺の5年間は平和だった、毎日子供らしく友達と遊んだ、詳しく言えばなのはと遊んで、次の日はなのはと遊んで、又次の日はなのはと遊んで…アレ？俺なのはとしか遊んで無くな？

まあ、そんな感じに転生して5年が経った訳だが、問題が起きた。

簡単に言くと、なのはの父親高町 士郎が瀕死の重傷を負って入院中なのだ。

その性で高町家が大変な事になっている、なのはの母親高町 桃子は自営業の喫茶店「翠屋」の営業と士郎のお見舞いでゆっくりする暇は無く、なのはの姉の高町 美由希はその手伝いで同じくゆっくりする暇は無い。

なのはの兄高町 恭也は士郎の敵討ちをしようと毎日鍛錬している、別に鍛錬する位なら文句は無い、だが、常に殺気立っている為なのはが怖がっているのだ。

なのはもなのはで、家族がバラバラになっている為、良い子でいないといけないと思い込み、迷惑をかけない様に何時も1人で遊んでいる。

こんな風に今、高町家は大変な事になっていた。

そして今、俺は怒っていた、妹を怖がらせている恭也に怒りは有るが、今俺が一番怒っているのは、なのはにだった。

家族に今甘える事が出来なくて、寂しい思いでいるのは分かる、だけれど何で俺を頼らない、なのはに取って友達はその程度なのか？だから、俺は今なのはを捜していた。

光一「ハア…なのは何処に居るんだ？」

光一は高町家に行ったが、既になのはは居らず、町中を捜していた。

光一「何で、こんな時に限って見つからないんだよ！」

3時間位捜したが、一向に見つからない。

光一「もう一度なのはの家に行くか」

光一が高町家にもう一度行く為引き返そうとした時。

？「ぐす…うつ…ぐずっ」

公園の方から泣き声が聞こえた。

光一（この泣き声…なのはか？）

光一は公園の泣き声が聞こえる場所に行ってみた。

そこには、声を殺し泣いているなのはが居た。

光一^{…なのは}

光一は、なのはの目の前まで行き声をかけた。

光一「なのはちゃん」

なのは「!？」

なのはは光一の声にハツとなり、顔を上げた。

なのは「ぐす…光…くん…どうして？」

なのはは長い間泣いていたのか、顔がグズグズになっていた。

なのは「ぐずっ…どうして此处に居るの？」

光一「なのはちゃんを捜しに来たんだよ、泣いてたの？」

なのは「泣いて無いよ」

なのはは目元を拭う。

光一「なのはちゃんと最近遊んで無いから来たんだよ」

なのは「も…う……」

光一「え？」

なのは「もう良いよ光くん、なのは良い子だから1人で遊んでるから、光くんも他の友達と遊んで良いよ」

光一（ハア…このバカは、バカ過ぎて怒る気も失せた）

光一はなのはを抱き締めた。

なのは「こ…光くん？」

光一「なあ、なのは俺頼り無いか？」

なのは「そんな事無いよ！」

光一「なら、なんで1人で抱え込む！？」

なのは「だって…なのはの問題…だから…光くんに迷惑かけたく無かったの…迷惑かけたら…光くんに嫌われて…何処かに行っちゃう気がして」

なのはが泣きながら答える。

光一「バカ…なのはを置いて行くわけ無いだろ、俺がお前の全てを受け止めてやる」

なのは「本当…に？」

光一「ああ！」

なのは「なら、もうなのは我慢しなくて良いの？」

光一「もう我慢しなくて良い」

なのは「ヒッグ…寂しかった…ぐずっ…寂しかったよ…うあ——
ん！」

なのはは、今まで我慢していた分思いつきり泣いた。

なのはが泣き終わった頃には空は茜色に染まっていた。

なのは「／／／光くん…その…ありがとう／／／」

光一「別に良いって」

なのは「／／／／光くん、今さっき言ったこと本当？」

光一「今さっき？」

光一は色々言った為、どの事を言っているのか分からなかった。

なのは「全て受け止めるって」

光一「ああ、本当だ！」

なのは「それって、なのは以外にも言った事ある？」

光一「？…無いな」

なのは「な、なら…なのはが特別なの？」

光一（特別？…親友とかそういう意味か？）

光一「ああ、特別だ」

なのは「／／／／／」

光一「な、なのは！？」

なのはは風邪じゃ無いかと言うほど顔を真っ赤にしていた。

この後なのはを家に送り、深夜になってから病院に向かった。

光一「ふう…見つからず此处まで来れた」

今、光一は士郎の病室に忍び込んでいた。

光一「さて、士郎さんの怪我を治すか」

光一は布団を捲って士郎の状態を調べた。

光一「…コレで良く生きられたな」

光一は士郎の状態を見て驚いた、普通の人間なら生きてられない怪我なのだ。

光一「…あの力を使うか」

俺には、特殊な力が有った、1つは時間を戻す力、この力はどんな物でも時間を戻す事が出来る、例えばボールを投げてこの力を使え

ばボールを投げる前に戻す事が出来る、2つ目の力は物の数や距離など数値に係る物を変える事が出来る力、例えば1個の物を2個3個と増やしたり逆に減らしたり出来る。

俺は、この力に「刻の逆行」「有限と無限」と名前を付けた。

しかし、この力にもリスクが有る、かなりの生命力を使うのだ、もし刻の逆行を長時間や連続で使うと俺は死んでしまう。

光一「全快は無理だな…7割位か」

今の自分では、全快は無理だと分かり、7割程度怪我を治す為、刻の逆行を使った。

光一が、士郎に刻の逆行を使った次の日。

なのは「光くん、お父さんが目を覚ましたの!」

なのはは士郎が目を覚ました事を、光一に伝えに来た。

光一「良かったねなのはちゃん」

なのは「うん!」

この後も、なのはと光一が話していると。

なのは「光くん…聞いて良い?」

光一「何、なのはちゃん」

なのは「光くん、昨日と喋り方が違うの」

光一「えーと、覚えてたの？」

なのは「うん」

光一「嫌だった？」

なのは「嫌じゃないの、むしろ男らしくて格好良かったの」

光一「じゃあ、これからは昨日みたいな感じで話すよ」

なのは「うん！」

光一「じゃあ、なのは士郎さんのお見舞い行くか」

なのは「／／／うん、行くの／／／」

なのは（格好良いの）

なのはは顔を赤らめながら、光一と手を繋ぎ士郎のお見舞いに向かった。

お見舞いに向かう途中。

なのは「ねえ…光くん」

光一「何だ？」

なのは「これからもずっとなのはと一緒に居てくれる？」

なのはは光一に聞く。

光一「ああ、一緒に居てやる」

なのは「本当に？」

光一「誓っても良いよ」

なのは「約束だよ」

光一は、これからどんな事が有ってもなのはを絶対を守ろうと誓い、
なのははこれからどんな事が有っても光一を好きで居続けようと誓
うのだった。

魔法少女初めます（前書き）

今作から、無印突入

出来れば、感想やアドバイス宜しくお願いします

魔法少女初めます

皆さんお久しぶりです、アレから三年、俺となのはは、八歳になりました。

俺達が過ごした三年間は、目まぐるしい毎日だった。

何がそんなに目まぐるしかったかって？まず、俺達は私立の学校に通い初めた、私立聖祥大付属小学校と、何とも長ったらしい名前の学校である。

他にも、なのはに、俺以外の友達が出来た、名前は、アリサ・バニングスと、月村　すぐかと言う、どういった経緯で出会ったかは、また今度として、今では、なのは達三人と、俺を含めた四人で連んでいる、最近の悩みは、三人共上位クラスの可愛さなので、一緒に居る俺は、男子から、妬みの視線の集中攻撃を受けている、そこ、石投げない！

そして一番変わった事は、俺となのはの関係である、いや、俺の方は、今までと変わらず接している。

寧ろ問題は、なのはである、三年前の約束（誓い）のせいで、非常に面倒くさい事になった。

大ざっぱに言うと、なのはの俺に対するコミュニケーションが異常過ぎる、言っなれば、依存症である、どれほどの物か、今までにあった事を上げると。

俺となのはが、公園で遊んでいると、同い年位の女の子が遊んでい

て、その子達が遊んでいたボールがこっちに飛んで来た、そのボールを拾って渡して上げて後、少し話しただけだった。

急に、スネ辺りを抓られた痛みが走った。

光一「つつ！な、なのはどうした痛いんだが」

そう言っつて、俺がなのはの方を向くと、俺は、恐怖を感じてしまった、そこには、目を単色にしてこつちを恨めしそうに睨むなのはが居た。

光一「なのは、ど、どうした？怖いぞ？」

なのは「光くんは、なのはの物なんだよ、何勝手になのは以外の女の子と、話ししているのかな？」

俺は、本能が直ぐに謝れと、警報を鳴らしているのが、分かった。

光一「ごめん、なのは」

なのは「本当に分かってるの？なら、約束して、なのはの許可無く、女の子と話さないって」

光一「わ、分かった、約束する」

こんな感じに、なのはが凄く怖いのだ。

そんな感じに、俺としては、目まぐるしい毎日を過ごしていた、まあ、平和だから、

いいけど、これからものは達四人と、馬鹿やって過ごして行けばそれで良い。

だがど、そんな平和な日々はある物がこの町に降って来たせいで終わりを告げる事になるとは、俺は思いもしなかった。

4月のある夜

？「お願いします、誰か助けて下さい」

光一「つつ！何だ？何処から声がきこえる？」

？「・・・・・・・・」

光一「空耳か？まあいいや、そろそろ寝るか」

俺は、この時に、もう分かっていたんだと思う、俺の平和な日常が終わる事が。

次の日・朝

なのは「光くん、光くん朝なの、起きるの」

光一「なのは、今まで黙ってたが、聞きたい事がある」

なのは「なに？」

光一「何で、なのはが俺を起こしてる、それに、この部屋鍵閉めてたよな？」

なのは「夫を起こすのは、妻の役目なの」

光一「だれが、夫婦だよ！たく、で、鍵は？」

なのは「早苗おばさんから、貰ったの」

光一（母さん、あんたのせいかな）

光一は頭が痛くなってきた。

なのは「大丈夫？」

光一「ああ、大丈夫だ、なのは部屋の外に出てってくれるか？着替えるから」

なのは「光くんの裸！？見たいの、寧ろ見させて下さい！」

なのはが綺麗な土下座を決めてくる。

光一「い・い・か・ら、出ていけ！！」

俺が怒ると、なのはが、走って出ていった。

そして、着替えて下に降りると、母さんが、ニヤニヤしながら見ていた。

光一「母さん、何が可笑しの？」

俺は、出来るだけ平常心を保ちながら聞いた？

早苗「あらあら、何のことかしら？そう言う事聞くと云うことは、

なのはちゃんとやましい事してたのかしら？」

光一「くっ！別に何でもないよ／＼／＼」

早苗（あらあら、脈アリかしら？）

そして、俺となのはが一緒に家を出た。

光一「なあ、なのはそれ止めないか？」

今の俺達の状態は、俺の腕になのはが腕を絡ましている。

なのは「いや？」

なのはが、涙目＋上目遣いで聞いてくる。

光一「くっ！／＼／＼別に嫌じゃ無いよ」

なのは「うん」

そして、送迎バスが来て乗ると、アリサとすずかがいた。

アリサ「二人共こっちよ」

なのは「アリサちゃんすずかちゃんおはよう」

すずか「おはようなのはちゃん」

アリサ「ええ、おはようなのはと、光一」

すずか「おはよう光くん」

光一「おう、おはよう二人共」

そして、4人並んで座った。

アリサ「それにしても、相変わらずね、あんたらの仲の良さ」

アリサが、少し呆れ気味に行った

すずか「うん、遠くから見ても、仲の良さが分かるもんね」

すずかが、少し苦笑気味に答える。

なのは「当たり前なの、光くんはなのはの大切なだんな」幼なじみな「なの」

なのはが少し落ち込んでいた。

光一（仕方ない）

光一はなのはの頭を撫でた。

光一「なのは落ち込むなよ、俺に取っては、特別な幼なじみ何だから」

なのは「と、特別！本当？／＼／＼／」

光一「当たり前だろ」

なのは「光くん」

なのはは目に涙を溜めながら、抱きついて来た」

光「だから、落ち込むなよな？」

なのは「うん」

アリサ（はあ、イチャつくなら、よそでやってよ）

すずか（あはは）

アリサは呆れ、すずかは渴いた笑いしか出ないねであった。

そんな事している内に、学校に着いた。

なのは「あ！そうだ！光くん昨日ね、変な夢見たの」

光「変な夢？」

なのは「うん、誰かが、なのはに助けを求めるの」

アリサ「何よその夢？」

なのは「わかんない、でも凄くリアルだったの」

すずか「もしかしたら、これから何か起きるのかも？」

なのは「そうなのかな？」

光一「そう言えば、昨日同じ様な見たな」

なのは「本当？」

光一「ああ、確か、「誰でも構いません、助けて下さい」だったか？」

なのは「それなの、光くんも同じ夢を見るなんて、ハッ！、やっぱり、なのはと光くんは結ばれる運命だったの」

光一（最近のなのはは本当に飛んでんな）

そしてお昼

なのは「将来の夢か」

光一「まだ、言ってるのか？」

実を言うと、前の授業で「将来の夢」について出たのだ。

なのは「うん、あつ、アリサとすずかちゃんは、もう決まってるんだよね」

アリサ「まあ、私は、パパを手伝う為に大学を出るは」

すずか「うん、私も機械系の仕事に就くと思うな」

なのは「光くんは？」

光一「俺か？まあ、平穩に暮らせたら、それで良いよ」

アリサ「つまんない男ね」

光一「うるせー」

すずか「なのはちゃんは？」

アリサ「決まって無いとかは、無しよ」

なのは「アリサちゃん失礼なの、なのはには、とても大きな夢があるの、それは、光くんのお嫁さんなの」

アリサ「だつてさ光一」

光一「はあ、寢言は寢て言え」

なのは「光くんが、冷たいの」

そんな会話をしている内に放課後

アリサ「此処此処、塾への近道なのよ、多少道が悪いけど」

すずか「知らなかった」

なのは「あれ、此処、昨日の夢で見た場所」

光一「確かに、似ているな」

その時

『誰でも構いません、助けて下さい』

な・光「今聞こえた!」

アリサ「何も聞こえないわよ」

すずか「うん」

な・光「こっちなのだ!」

そう言つて、なのは達は走り出した。

アリサ「ちよつ、ちよつと待ちなさいよ!」

すずか「待って!」

アリサとすずかも二人に続いて走りだす。

しばらく走ると、何かを見つけた。

光「あれ!」

光一は木の傍で、何かを見つけた。近づいて見てみる、変わった品種のフェレットだった。

その後、アリサの紹介でフェレットを動物病院に預けた。

その後、誰の家に預けるか、帰って家族に聞いてメールしあう事に

なった。

神崎家・食事中

光一「あつ！そつだ父さん母さん、今日フェレット拾ったんだけど、飼って良いかな？」

一「フェレットって、あのフェレットか？」

光一「うん」

早苗「フェレットが倒れてるって、珍しいわね」

光一「だから、飼主が見つかるまで、保護しようかなって」

一「わかった、飼って良いよ」

光一「ありがとう、母さんは？」

早苗「良いわよ」

光一「じゃあ、後でみんなに、メールしておくよ」

食後

光一「えーと「フェレットは俺が飼える」って送信」

光一「ふう、今日は色々あったな」

光一（そろそろ寝るかな）

俺が寝ようと、した時、突然。

『誰か、僕に力を貸して下さい』

光一（これは！）

光一は急いで、動物病院の方へ行った。

動物病院の方に行ってみると、そこは、瓦礫などで、荒れ果てた道だった。

そして、そこには、内の制服に似た服を着たのはがいた。

全ての物語が今動きだした

魔法少女初めます（後書き）

内のはは、何気にチートです

次回「魔法の力」

魔法の力（前書き）

作者「お久しぶりです！」

光一「本当に久しぶりだな、今まで何やってたんだ？」

作者「いや、単に忙しくて、手が回らなかった」

光一「ハア、これからは、ちゃんと更新しろよ」

作者「わかってます、それと、今週は一気に3話位更新する予定！」

光一「3話！？また大きく出たな」

作者「まあ、今週末が単に暇になったただけなんだけどね、と言う訳で一気に3話位更新する予定なので、良ければ読んで行って下さい」

魔法の力

光「何だよこれ!？」

俺があんたの声を聴いて動物病院に来てみたら、其処は酷い状況になっていた。

壁や塀は崩れ、地面は砕けてまるで戦場跡だった。

光「マジで、何が有ったんだ?」

《ドーーーーーン》

光「ハッ!？」

近くの方で物凄い音が聴こえ、そっちの方へ行ってみると、其処には黒い塊の生物と聖祥の制服に似た服を着たなのはが居た。

時間を遡る【なのはside】

なのは自室

なのは「光くん、フレットさん飼えるんだ、良かった」

光くんからのメールを見て安心してしていると

?『聞こえますか?僕の声が聞こえますか?』

急に頭の中に声が入ってきた。

なのは（この声）

？『聞いてください、僕の声が聞こえる方、お願いです力を貸してください！』

フェレットさんからの声を聞いて急いで病院に行くと。

いきなりドームの様な物が張られた。

《ドーーーーーン》

物凄い音がして、其処に行くと、黒い塊の生物から逃げるフェレットさんが居た。

フェレットがなのはの方へ飛んで来てキャッチすると、黒い塊がなのはの方へ向かったきた。

なのは「何！？一体何なの？」

？「来てくれたの？」

なのは「フェレットさんが喋ったの！？」

なのははフェレットが喋った事に驚いていると。

黒い塊がなのはの方へ向かって来ようとしていた。

なのはとフェレットが逃げながら。

なのは「あれ何なの！？何が起きてるの！？」

？「あの、お願いがあるんです！僕に少しだけ、力を貸して下さい！お礼は、必ずしますから！」

なのは「お礼とか、そんな場合じゃ無いでしょ！？」

フェレットがなのはの腕の中から飛び降りてなのはに言った。

？「今の僕の魔力じゃアレを止められない、だけどあなたなら！」

黒い塊「ぐおーーーーー！」

なのは「ハッ！？」

なのはが後ろを向くと、黒い塊の生物が追っていた。

なのは「どうすれば良いの？」

？「これを」

フェレットはなのはに赤いビー玉サイズの宝石を渡した。

？「それを手に、目を閉じて心を澄まして、僕の言う通りに繰り返して」

？「風は空に星は天に」

なのは「風は空に星は天に」

？「不屈の魂はこの胸に」

なのは「不屈の魂はこの胸に」

？「この手に魔法を！」

なのは「この手に魔法を！」

なのは・？「レイジングハートセットアップ」

なのはが言い終わると光の柱が、天高く登った

？「なんて…魔力…」

RH「初めまして、新たな使用者さん」

いきなり宝石が喋って、なのははびっくりしてしまった。

なのは「え、あつ初めまして！」

RH「あなたを新たな使用者として、認めました」

なのは「え」と、ありがとうございます？」

RH「デバイス、防護服共にマスターが最適だと思う形状を、選んで下さい」

なのは「えっ！？デバイス？防護服？何それ？分から無いよ！」

RH「言い直します、マスターが一番最適だと思う武器と身を守る服を、選んで下さい」

レイジングハートが言い直し、やっとなのは理解した。

なのは「じゃあ、武器は杖で、服は聖祥の制服に」

RH「分かりました、では、行きます」

レイジングハートが言い終わると、なのはの服が聖祥の制服に似た防護服になり、その手には杖が握られていた。

「よし、成功だ！」

なのはが変身し、自分の格好を見て。

なのは「ふえええええ！？」

かなり驚いていた。

なのは「変身してる！何で？どうなってるの？」

なのはがパニックになっていると。

黒い塊「ぐおー！ー！ー！ー！」

黒い塊の生物は雄叫びを上げながら、なのはの方に飛びかかって来た。

なのは「ふええええええ！？」

なのははとっさに後ろに飛ぶと、言葉の通りに空を飛んでいた。

なのは「えー！飛んでるの！？」

RH「魔法についての知識は？」

なのは「全然まったくないの？」

なのはは、パニックになり過ぎて逆に質問してしまった。

RH「では、私が教えますから、私の指示通りに」

パニックになっているなのはに、冷静に答えるレイジングハート。

なのは「はっはい！」

RH「飛びます（フライヤーファン）」

レイジングハートが呪文を言うと、なのはの足に桜色の羽が生え、黒い塊の生物の攻撃を避け始めた。

そして、民家の屋根の上に着地した。

なのは（ふええええええさつきから一体何が起きてるの！？）」

なのはは自分が変身したり、魔法を使ったりと、初めての体験に訳が分からなくなっていた

最初に戻って【光一side】

光一「あれはなのは？」

なのはが黒い塊の生物に追われている所を見てしまった。

黒い塊の生物がなのはを攻撃しようとして、光一はとっさに叫んでしまった。

光一「なのは危ない！？」

【なのはside】

黒い塊の生物がなのはに攻撃してきて、避けようとした時。

光一「なのは危ない！？」

なのは（えっ！？この声光くん？）

声が聞こえた場所を見ると、そこには光くんが居た。

黒い塊の生物も光一の声に気付いたのか、なのはへの攻撃を止め、光一の方を見ていた。

なのは「えっ！？何で光くんが此处に居るの？」

なのはが何故光一が此处に居るのか、分からず、混乱していると。

黒い塊「ぐおーーーーー！」

黒い塊の生物は、なのはから光一に狙いを替え、光一に攻撃を仕掛けた。

なのは「光くんよけて！」

【光一 side】

なのは「光くんよけて！」

光一「ハッ！」

光一は、なのはの声で気付きとつさに避けた。

光一「何なんだよ！夢なら質が悪いぞコレ」

光一は目の前の現実には毒つきながらも、攻撃を避け続けていた。

黒い塊の生物は光一に攻撃を掛け続けていたが、光一が避け続ける為、痺れを切らし、突っ込んで来た。

黒い塊「ぐおーーーーー！」

光一「くっ！」

光一は何とか避ける事に成功した、黒い塊の生物はそのまま民家に突っ込んでしまった。

なのははその隙を見計らって、光一の方に飛んで行った。

なのは「光くん大丈夫？」

光一「ああ、大丈夫だ、なあ、なのはアレ何だ？」

光一がなのはに黒い塊の事を聞くと「

？「あれは、ロストギアの異相体です！」

フェレットが光一にそう言った。

光一「うお！？フェレットが喋ってる！」

なのはに引き続き光一も、フェレットが喋った事に驚いていた。

？「アレは凄く危ない物なんです、封印しないと、街が大変な事になってしまいます！」

光一「確かに早く何とかしないとヤバいな、でも、封印ってどうやるんだ？」

光一が封印方法をフェレットに聞くと。

？「封印は、なのはが持っているデバイスで行います、封印するには、接近して封印魔法を発動する必要があります」

なのは「えーっと、この杖で？」

なのはが聞き返した時。

黒い塊「ぐおーーーーー！」

黒い塊の生物が凄い勢いよいで突っ込んで来た。

黒い塊の生物がなのは達に当たろうとした時。

RH「プロテクション」

レイジングハートが攻撃を防いでくれた。

？「予想以上の素質だ」

フェレットがなのはの素質に驚いていると。

光一「オイ、フェレットあの杖以外に封印する事は出来ないのか？」

？「無理です！他に方法はありません」

光一「なのは、アレに近づけないか？」

なのは「む無理だよー！近づけないの」

なのはが涙を浮かべながら答えた。

光一「ちっ、仕方無いなのは！俺が囫になって隙を作るその隙に封印しろ！」

なのは「光くん危ないよ！」

光一「仕方無いだろ、俺じゃ封印出来ないんだから」

なのは「で、でも……」

なのはが不安げに光一を見ていた。

光一はそんななのはの頭を撫で、微笑みながら。

光一「安心しろ、無茶はしないから」

なのは「本当？」

光一「ああ、本当だ」

なのは「じゃあ、約束」

なのははそう言つて小指を出して来た、光一も小指を出し、小指と小指を絡ませ指きりをした。

光一「じゃあ、いっちょやるか！」

？「本当に大丈夫ですか！？アレは危険なんですよ！」

光一「大丈夫だって、俺を信じろ！」

光一はそう言つて黒い塊の生物に向かって走り始めた。

黒い塊「ぐおーーーーー！」

黒い塊の生物は光一に向かって触手で攻撃を始めた。

光一はその攻撃を飛んだり跳ねたりして、縦横無尽に飛び回り避け続けた。

そして、光一に向かって黒い塊の生物が突っ込んで来た。

光一（来た！）

光一は突っ込んで来た黒い塊の生物を真っ正面から受け止めた。

光一「くう、うおーーーーー！」

暫くして、勢いが無くなり黒い塊の生物は止まった。

？「真っ正面から受け止めた？」

なのは「光くん！？」

光一「なのは！今だ封印しろ！」

光一はなのはに指示を出した。

なのは「うん！レイジングハート、シーリングモード！」

RH「イエスマスター、モードチェンジ、シーリングモード」

なのは「封印！」

RH「シーリング」

黒い塊「ぐおーーーーー！」

なのはが封印すると、黒い塊の生物が苦しみだし、黒い塊の生物は

消え、そして菱形の宝石だけが残った。

光「終わったのか？」

？「まだ終わってません、なのはデバイスはその宝石に当てて下さい」

なのははフェレットに言われた通りにデバイスを宝石に当てた瞬間宝石がデバイスの中に入って行った。

？「これで封印は終わりです、ありがとうございます」

フェレットがお礼を言ってきた、その時遠くの方から。

《ホオンホオン》

パトカーの音が段々近づいて来た。

なのは「コレって不味いかな？」

光「不味いだろうな」

なのは達が周りを見ると、道路や壁が碎け荒れ果てていた。

なのは「ごめんなさい！」

なのは達は一目散に公園まで逃げてきた。

なのは「ハアハア、此处まで来れば大丈夫だよね？」

光一「ハアハア、まあ大丈夫だろう、で、フェレット今さっきの事話してくれるだろ？」

光一がフェレットに問い掛けと。

？「分かりました、全て話ます、その前に自己紹介をします、僕の名前はユーノ スクライアと言います、スクライアは部族名なのでユーノで良いです」

なのは「私の名前は高町 なのは、なのはでいいよ、アレ？そう言えば今さっき私の名前呼んでたよね？」

ユーノ「はい、病院に運ばれた時、意識を失う前に聞いていたので」
なのは「何だ、そう言う事が、じゃあ改めて宜しくねユーノくん」

ユーノ「うん、宜しくなのは」

光一「じゃあ最後は俺だな、俺の名前は神埼 光一普通の小学生だ」
「そして、私の恋人なの！」

ユーノ「えっ！？そうなんですか？」

光一「いや、なのはが勝手に言ってるだけだから気にするな」

なのは「ぶーーーー！」

なのはが不機嫌そうに頬を膨らませていた。

ユーノ「えーと宜しくお願ひします」

光一「じゃあ、自己紹介も終わった事だし、説明してくれるか？」

ユーノ「はい、まずあの宝石はジュエルシードと言います」

なのは「ジュエルシード？」

ユーノ「はい、アレは僕達の世界で言う古代遺産なんです、ちよつとの暴走であんな風になってしまう、とても危険なエネルギー結晶体」

光一「僕達の世界？」

ユーノ「信じて貰えるか分からないけど、僕は別の世界から来ました、さっきなのはが使った力は魔法、僕の世界で使用されてる技術です」

光一「なるほど、で、なんでジュエルシードが別世界の此処にあるんだ？」

ユーノ「それは、僕のせいなんだ、僕は故郷で発掘を仕事にしている、古い遺産の中でアレを発見して、管理局に依頼して保護をして貰おうと思ったんだけど、僕が手配していた次元船が途中で事故にあつたみたいで、21個のジュエルシードはこの世界に散らばってしまった、だから僕が回収しようとする世界に来たけど」

光一「逆にやられてしまったと」

ユーノ「うっ！」

なのは「光くん！駄目だよそんな事言っちゃ！」

ユーノ「いえ、本当の事だから」

ユーノが目に見えて落ち込んでいると。

なのは「そうだ！ユーノくん私が手伝って上げる、みんなが協力すれば直ぐ集まるよ！」

なのはが協力を申し出るとユーノが嬉しそうに聞いてきた。

ユーノ「本当ですか？」

なのは「うん！」

光一「駄目だ！」

なのは「光くんどうして？どうして駄目なの？」

なのはが光一に聞くと。

光一「危険過ぎる、今回は偶然上手く行っただが、次に上手く行くとに限らない」

なのは「でも！ユーノくんが困ってるんだよ、それに、街だって大変な事になるかも知れない、そんなの見過ごせないよ！」

ユーノ「なのはもう良いよ、初めからコレは僕がやらないといけない事なんだ、だからなのはに頼む訳にはいけない」

なのは「ユーノくん」

なのはが心配そうにユーノを見ていた。

光一「たく、お前等は最後まで話を聞けっの」

な・ユ「えっ？」

光一「俺は最後まで言っただけ、たく、確かに今回は危険過ぎる、士郎さん達もなのはに何かあったら悲しむ、だから士郎さん達に魔法の事とか全て話して、許可が貰えたらやっても良い」

なのは「本当!？」

なのはが嬉しそうに聞いてきた。

光一「ああ、許可が貰えたらな」

なのは「光くんは手伝ってくれないの？」

光一「アホ、なのはがやるのに手伝わない訳が無いだろ」

なのは「どうして？」

光一「うっ！そのだ、俺はなのはが傷付く所を見たく無いんだよ／＼／」

なのは「うん、ありがとう／＼／／」

2人の間に微妙な空気が流れていた、そんな中。

ユーノ「あの、本当に手伝ってくれるんですか？」

ユーノが空気に耐えきれず2人に聞いた。

光一「ああ、親から許可が貰えたらな」

ユーノ「ありがとうございます」

光一「じゃあ、話しはコレで終わりさあ帰るぞ」

なのは「うん！」

なのは達が帰ろうとした時、光一は気になった事をユーノに聞いた。

光一「そう言えばユーノお前、仲間が居るんじゃないか？」

ユーノ「えっ仲間？僕は一人でこの世界に来たので、仲間はいませんよ」

光一「はっ？でも聞こえたぞ、ユーノの声ともう一つ女性の声で、助けて下さい」って」

ユーノ「そんな事あるわけありません！僕一人で来たんだから」

ユーノが仲間が居るん事を否定する、その時。

『助けて下さい』

光一「ほらやつぱり聞こえた」

ユーノ「そんな、まさか僕の他に魔導師が？」

確かに聞こえた、声にユーノは驚いていた。

なのは「行ってみよ、直ぐ近くみたい」

なのは達は、声が聞こえた場所に行ってみるとそこには、猫が倒れていた、そしてその首には、なのはのレイジングハートに似た青色の宝石が付いていた。

説得とシスコン（前書き）

約束通り2回目の更新、このまま3回目めも……行けると良いな！

説得とシスコン

士・恭「駄目だ！」

なのは「なんで!？」

おはようございます神崎 光一です、今回いきなりなので、分からない人も居ると思います、だから時間を遡って1から説明して行きます。

時間を遡ってなのは達が猫を見つけた所から。

なのは「猫さんが倒れてる！」

光一「かなり弱ってるな、なのはこの猫家まで運ぶぞ！」

なのは「うん！」

光一は、猫が余り負担の掛からない抱き方で、一番近いなのは家に運んだ。

なのは「光くん、開いたよ！」

なのはは急いで玄関を開け光一達に家に入る様に促した。

なのは「光くんこつち！」

なのはが光一を誘導しようとしたその時。

？「何処に行こうとしてるんだ？」

なのは「ニヤッ！？」

光一「あつ！えーと恭兄こんばんわ」

なのは「お、お兄ちゃん！」

なのはの兄である高町恭也が立っていた。

光一「あつ！そうだ、恭兄弱ってる猫が居るんだけど毛布か何か無い？」

なのは「そうなの、お兄ちゃん猫さんが大変なの！」

恭也「何！？」

その後、一様一般的な治療を行って何とか持ち直した、その後、光一の両親と高町家全員が集まって光一となのはとユーノの話を聞いた。

ユーノ「これで、僕が話せる事全てです、すいません、なのは達を巻き込んでしまつて」

ユーノは申し訳無さそうに言う。

士郎「なる程、そんな事が」

なのは「お父さんお願い、私ユーノくんを助けてあげたいの！」

此処で最初に戻る。

士・恭「駄目だ！」

なのは「なんで!？」

光一（まあ、分かってたけど）

なのは「なんで駄目なの!？ジュエルシード封印しないと大変な事になるんだよ！」

恭也「だからって、なのはには危険過ぎる！」

なのは「でも！」

恭也「でもじゃ無い！」

士郎「ユーノくん、確か君の説明の中に管理局と言うのが無かったかい？」

士郎はユーノの説明を思い出し、ユーノに質問する。

ユーノ「は、はい、言いました」

士郎「その管理局にお願いする事は出来ないかい？」

ユーノ「確かに管理局はそう言った仕事もあります。」

恭也「なら、その管理局に頼めば良いじゃないか」

ユーノ「もう依頼してあります、でも直ぐには動いてくれません」

士郎「どれくらい掛かる？」

ユーノ「多分、1、2カ月は無理だと思います、管理局も人手不足だから」

恭也「なっ！そんなに掛かるのか！？」

なのは「だから、その間ジュエルシールドが暴走するかも、だから私ユーノの手伝いがしたいの！」

なのはが自分の気持ちを言う。

恭也「それでも、なのはには危険過ぎる！」

逆に恭也もなのはが協力する事を否定する。

士郎は暫く考え、ユーノに聞いた。

士郎「ユーノくん、そのデバイスはなのは以外は使え無いかい？
例えば私とか」

ユーノ「無理です、皆さんには魔法が使えません」

士郎「だが、なのはは使えたんだろ？」

ユーノ「なのはには、魔法を使う上で必要なリンカーコアがあります」

全員「リンカーコア？」

光一（あつ、みんな喋った今さっきまで空気だったのに）

光一は呑気にそんな事を考えていた。

ユーノ「リンカーコアは、魔法を使う為に必要な物なのは、そのリンカーコアがあり、それもかなりの才能があります」

美由希「へーなのは凄い才能があるんだってお母さん」

桃子「やったじゃないのは」

高町家女性陣は、なのはが才能があることに喜んでいた。

士郎「なのは以外にそのリンカーコアを持っている人は居ないかい？」

士郎がユーノに聞くと。

ユーノ「後、光一も持ってるみたいです」

光一「俺も？」

ユーノ「うん、だって今さっき結界に入ってたじゃない、結界に入れるってことは、魔法が使える証拠だよ」

なのは「光くんも魔法使えるの？じゃあ、なのはと同じ…はっ！なのはと光くんだけが使える…だけがコレは運命だよ光くん！」

なのはがいきなり荒い息遣いになり、目はまるで獲物を狩る獣みたいになっていた。

光一「なのは落ち着け！ユーノも使える2人だけじゃ無い」

光一の説得で暫くしてなのはが元に戻り話の続きに戻った。

恭也「じゃあ、光一も魔法が使えるんだな？」

光一「みたいだね」

恭也「じゃあ、光一が行け」

恭也は光一に言い放った。

光一「ちよっ！？ちよっと待って恭兄、なのはは駄目で俺は良いってどう言う事？」

恭也「なのはに危険な真似させる訳が無いだろ、光一なら多少怪我しても、問題無い」

光一「問題あるわー！？このシスコンがいい加減にしろよ！」

恭也「俺は、シスコンじゃ無い！ただなのはが大切なだけだ！」

光一「それがシスコンって言うんだよ、馬鹿」

2人は段々ヒートアップしていった。

士郎「2人共やめなさい」

恭也「だが、父さん！」

光一「止めないで下さい士郎さん！」

士郎「やめなさい」

今度は、少し睨みを入れ2人を止めた。

2人「くっ！」

士郎は2人を止め、その後話を戻した。

士郎「なのは、ユーノくんの手伝いしたいかい？」

なのは「したいの！お父さんお願い、やらせて」

士郎は暫く考え、桃子と話合った結果。

士郎「なのは、手伝ってあげなさい」

なのは「本当！？」

ユーノ「良いんですか？」

士郎「ああ、良いんだけど、無茶だけはしない様に、約束出来るかい？」

なのは「約束する！」

なのはは士郎達と約束して、ユーノを手伝いの許可を貰ったが、
人納得がいけない人が居た。 1

恭也「駄目だ！」

そう、我らがシスコン高町 恭也だ。

シスコン「父さん、なのはには危険過ぎる！」

士郎「だが、なのはが決めた事だ、私達は応援しないといけない」

シスコン「だけど！」

光一「シス兄良いじゃない、なのはがやるって言ってるんだから」

シスコン「それなら、光一お前がやれば良い、それと俺の名前はシ
スコンでもシス兄でも無い！」

恭也がツツコム。

士郎「恭也！いい加減にしなさい、なのはだって遊びでやってるん
じゃ無いんだ！」

恭也「くっ、だけど…分かった、光一お前がなのはを守れ絶対にだ
！」

恭也が光一に言い光一も。

光一「何当たり前の事言ってるの恭兄、なのはは絶対守る、例え何
があっても」

なのは「光くん／＼／＼／」

桃子「アラアラ、なのは良かったわね、何があっても守ってくれるらしいわよ、まるでプロポーズね」

なのは「／＼／＼／プロポーズ！／＼／／」

桃子が言った一言でなのは真っ赤になり、美由希はニヤニヤこつちを見て土郎と恭也が、光一に物凄い勢いで詰め寄りユーノが慌て、光一が2人に言い訳すると言う状況が生まれた。

もうカオスです。

光一（誰か助けてくれー！）

無残にも誰一人助けてくれる人はいなかった。

説得とシスコン（後書き）

今回の話しは楽しんで頂けましたか？

次の話は拾った猫に関する話です。

後、この作品は原作を大きく改変していきます、もし自分が作る作品に「止める、まだ引き返せる」と思う方は感想を頂いたら幸いです。

では次回「リニス」お楽しみ下さい

リニス（前書き）

約束通り3話目投稿します。

今回やってしまった感があります、読んで頂けたら分かりますが。

だが、悔いは無い！

リニス

なのは達が高町家で魔法の事を話暫くして。

なのは「そう言えば、猫さん大丈夫かな？」

なのはは公園で拾った猫が気になったのか、光一に聞いた。

光一「まあ、一樣治療したし大丈夫だろ」

なのは「うん！」

ユーノ（あの猫念話を使ってた、多分僕みたいな魔導師もしくは、使い魔）

光一となのはがそう言った会話をしている中、ユーノだけが別の事を考えていた。

暫くして、光一が家に帰る為、高町家の面々にその事を伝えたと、

桃子が提案した。

桃子「あら光一くんもう夜遅いし、家に泊まっていきなさい」

物凄い提案をしてきた。

別に高町家に泊まる事が嫌と言う訳では無い、高町家の面々は優しく暖かい、だから問題は無いのだが、高町家で寝る事が出来無い、嫌言い直そう、寝させて貰えないのだ、だからと言って夜通し騒いだり高町家のベッドでは眠れない訳では無い、問題はなのはなのだ。

小さい頃は良かった、ただなのはと一緒に同じベッドで寝る位で、微笑ましいな程度だった、が、小学校に入学した頃事件が起きた。

この日も、なのはのお願いで高町家に泊まったそこまでは良かった、だが、夜中お腹の上に重みを感じ目を覚ますと、目の前になのはの顔があつた、なのはは俺が寝ている隙にキスをしようとしていた、あの時はマジでビックリした、最近では、俺の貞操の危険を感じている、だから俺は高町家に泊まる事に躊躇いがあつた。

そんな事を余所になのはは、顔がパアと明るくなり、桃子の案を賛成した。

だが、俺はその案を断つた、だって、今日色々ありすぎて、かなり眠たい、今の俺になのはから貞操を守る自信が無いマジで。

桃子「でも、この時間に家に帰るのは、危ないは」

光一「いえ、家まで5分も掛かりません」

桃子「別に遠慮しなくても」

光一「別に遠慮してません」

桃子「外は真っ暗だし、不審者に襲われるかも」

光一「この家に居ると、なのはに襲われます」

なのは「む、光くん私と寝るの嫌？」

なのはが頬を膨らませながら聞いてくる。

光一「お前と寝ると、身の危険を感じるんだよ！」

なのは「今日は大丈夫だよ！キスする位だから！」

光一「キスはするのかよ！それに今、今日はつて言ったら、マジで何する気！？」

なのは「それは／＼／＼私の口からは言えないよ！」

なのはは真っ赤になりそう言った、イヤマジで何する気？凄く怖いんだけど！

恭也「なっ！？キスだと、なのはにはまだ早い！」

なのはと俺の会話を聞いていた恭兄が、突っかかって来た、何時もなら面倒くさいが、今は有り難い、行け恭兄もつと言え。

そんな時、奥の部屋から猫の鳴き声がした。

猫「にゃ～～」

全員「ハッ！」

みんな猫の声に気づき猫を見に行った。

なのは「わー、猫さん目覚ましたんだ」

美由希「可愛い」

桃子「本当に可愛いわね」

女性陣は猫の可愛さにテンションが上がっていた。

なのはが猫を抱き上げ様とした時。

ユーノ「なのは待って！」

ユーノがなのはを止めた。

なのは「ユーノくん、どうして？」

ユーノ「その猫は、念話を使った、もしかしたら、魔導師かもしれない」

なのは「えっ！？そうなの？猫さん貴方は魔導師なの？」

なのはが猫に質問すると猫は。

猫「貴方方は、魔法を知っているんですか？」

全員「猫^{さん}が喋った！？」

ユーノを除く全員が、猫が喋った事に驚いた。

全員が落ち着いた後、簡単な自己紹介を行った。

リニス「私の名前は、リニスと言います私は使い魔です」

リリスが自己紹介を終えた後、何故あの場所に倒れていたのか聞くと。

リリス「前の主人に私は使い魔の契約を破棄されました、使い魔は主人の魔力で生きていますから、契約を破棄された事で、魔力切れを起こし倒れていました、そこを貴方方にひろわれたと言う事です」

ユーノ「なるほど、じゃあ、今でも魔力は？」

リリス「はい、かなりキツイです、直に魔力が無くなり私は死にます」

リリスの言葉に全員悲しそうな顔をする。

なのは「ねえ、リリスさん何とかならないんですか？」

リリス「1つだけ方法があります」

士郎「その方法は？」

リリス「また、誰かと再契約をする事です」

なのは「なら、私とすれば！」

リリス「無理です、私は高位の使い魔で私を維持する為にかなりの魔力が必要なんです」

ユーノ「因みに、どれくらい？」

ユーノがリリスに質問する。

リニス「せめてS位は必要です」

ユーノ「S!？」

リニスの言葉にユーノが真っ青になる。

なのは「光くんSってどれくらいかな？」

光一「さあ？ユーノが真っ青になる位だから多いんじゃないか？」

ユーノ「多いなんてものじゃ無いよ！僕が知る中でSを持つ人なんて滅多に居ないんだ！」

ユーノの説明にみんな驚いた。

リニス「はい、だから私は死ぬ事を受け入れました」

なのは「そんな!？駄目だよ！」

士郎「なのはの言う通り、諦めては駄目だ」

リニス「しかし…」

リニス達が話している中、光一は言った。

光一「なあ、俺じゃ駄目か？」

ユーノ「分からない、光一の魔力がどれ位なのか、計った訳じゃ無いから」

光一「じゃあ、試してみたら良い」

リニス「危険です！貴方に 何が起きるか分かりませんよ！」

なのは「そうだよ！光くん危険な事しないで」

なのは達が、光一を心配する。

光一「やらずに後悔するより、やって後悔した方がまだマシだ、それに誰かがやらないといけないんだから一緒だって」

なのは「光くん…」

それでも、なのはは心配そうに、光一を見ていた。

リニス「分かりました、宜しくお願いします」

そして、リニスと光一の契約が行われた。

リニス「では始めます」

リニスから説明があつた通りに、やり光一が魔力を放出した。

光一（すげー！これが魔力か）

光一が魔力に驚いている中、ユーノとリニスは光一の魔力量に驚いていた。

ユーノ（そんな！？何て魔力だ軽くSS以上有るぞ、なのはの素質

に驚いたけど、光一はそれ以上だ！)

リニス(凄い！単純な魔力量なら前の主人以上有るは、これなら)

そして、無事に契約は終わった。

なのは「光くん大丈夫？」

光一「ああ、問題ない」

恭也「気分が悪いとかは？」

光一「うーん、問題ないみたい」

士郎「違和感とかは？」

光一「そう言えば、何か繋がった感じがする」

美由希「繋がった感じ？」

光一「うん、何か絆みたいな」

リニス「それは、多分私に魔力を送ってるからでしょう」

光一「なるほど、そういう事」

桃子「本当に、何も無いのね？」

光一「はい」

なのは「良かったの、もし光くん何かあったら私泣いてたよ」

光一はなのはの頭を撫でながら。

光一「なのは心配させて後免な俺は大丈夫だから」

なのは「うん／＼／＼良かったの」

なのはは顔を真っ赤にして、答えた。

ユーノ「それにしても、光一凄いや！魔力量だけならSS以上あるよ」

全員「SS!？」

なのは「光くん凄い！」

恭也「光一お前は、化け物か」

士郎「流石だな」

美由希「光一くん凄いね」

桃子「驚いたは」

リニス「本当に素晴らしい素質を持っていますね、では、これから宜しく願いますマスター」

リニスが光一をマスターと認めた瞬間だった。

その後、リニスとユーノを連れて帰ろうとした時、桃子は思い出した。

桃子「光ーくん？何帰ろうとしているのかしら？」

桃子がニコニコしながら、言ってきた、クソ！忘れてたのに。

なのはも思い出したのか、光一の服を掴んで離さなかった。

なのは「光くん、一緒に寝よ！」

光一は結局折れて、高町家に泊まる事になったのだが。

なのは「マジで勘弁して下さい」

光一は見事な土下座で、一緒に寝る事を断った。

なのは「私と一緒に寝るのが嫌なんだ…」

なのはが目元に涙を溜めて言ってくる。

光一（クソ、それ卑怯だろ！）

光一が心の中で毒突くが、結局なのはに弱い光一は。

光一「ハァー、分かったよ一緒に寝るから、そんな顔するな」

なのはの言うことを聞く羽目になった。

そしてベッドに入って暫くすると。

なのは「光くん、起きてる?」

光一「何だなのは?」

なのは「えーと、今日色んな事があつたね?」

光一「まあな、色々有りすぎて疲れたよ」

なのは「あはは、うん、そうだね、ユーノくんに会って、魔法使いになって、リニスさんに会って色々有りすぎて疲れちゃった」

光一はなのはが震えてるのが分かった。

光一「怖いのか?」

なのは「分かんない、ねえ、光くん私ジュエルシード集められるかな?」

光一「分かんねえよ、でもなこれだけは言える、ジュエルシードを集めるのは、なのはじゃない」

なのは「どう言うこと?」

なのはは光一が言いたい事が、分からなかった。

光一「今さっき、なのははジュエルシードを集めるのは私って言うたろ」

なのは「うん」

光一「それは違う、私じゃなくて私達だ」

なのは「あっ!？」

なのははやつと理解した。

光一「1人が駄目なら2人、2人が駄目なら3人俺達は1人じゃないんだから大丈夫だよ、それに、なのはは俺が守ってやる! / /」

なのは「光くん / / /」

光一のセリフに2人共テレていた。

なのは「えへへ、光くん？」

光一「なんだ？」

なのは「大好きだよ! / / /」

光一「つつ! / / / 良いからもう寝ろ!」

光一はぶっきらぼうに答えた。

なのは「うん!」

リニス（後書き）

次回「守る力」お楽しみに

デバイスデータ（前書き）

本編かデバイスのデータどちらを更新するか迷いましたがデバイスのデータの方になりました。

デバイスデータ

名前：イージス

種類：インテリジェント デバイス

制作者：リニス

契約者：神崎光一

モード1：ナイト

基本的なモード、武装はシールドとバスターブレードになっている、守りに特化しており攻撃技もソニック・エッジだけで、後は防御系の技か補助系治癒系の技ばかりになっている。

モード2：バスター

イージスの2つ目のモード、言葉の通り遠距離攻撃を得意とした砲撃型、攻撃も遠距離ばかりで近距離攻撃が一切無い、他には、防御系補助系治癒系が基本的に使える。武装は杖

モード3：セイバー

イージスの3つ目のモード、近距離中距離攻撃を得意としており、遠距離攻撃が一切無い、後は防御系補助系補助系が基本的に使える。武装は巨剣

性格：基本的マスターに忠実、だがマスターを平気で罵るそれもマスターへの愛情が故、他にも自分のデバイスとしての力に絶対的自信を持っている、だが過信はしない。

備考：リニスが制作したデバイス、そのスペックは他のデバイスを凌駕しており、普通の魔導師では扱えない、その為デバイス自体が誰も認めず長い間眠っていたが、光一の信念を聞いて、自分を使う資格があると分かり、光一を使用者として認めた、デバイスには3つのモードが有りどれも一長一短で扱い憎い。

使用魔法

モード：ナイト

ソニック・エッジ：剣に魔力を纏わせ、斬撃を音速で飛ばす近・中距離の技

プロテクション：基本的な防御魔法3つのモード全てに登録されている

ハイプロテクション：プロテクションの強化型ナイトモードだけに登録されている

ブレイクシールド：接近戦専用カウンター防御魔法、シールドに敵の攻撃が当たった瞬間シールドが爆発して敵にダメージを与えるカウンター魔法

ミラーシールド：中・遠距離専用カウンター防御魔法、敵が魔法を放ちシールドに当たった瞬間反射し、敵に返す

オールデリート：どんな攻撃も一瞬で霧散させる、なのはのSLBも例外無く、条件は敵よりも魔力が多く無いと使えず自分の魔力も敵の魔法と同量の魔力を消耗する

オートバインド：光一が使うバインド、瞬時にイージスが100のプロセスを組み敵を縛る、敵がプロセスを突破してもイージスが失

ったプロセス分を瞬時に構成し縛り続ける為、なかなか破れない

ウィンドウイング：光一の飛行魔法

アクセル：強化魔法、全ての身体能力が強化される、この魔法は重ね掛けが出来極限まで強化出来るが、反動が大きく体を壊しかけ無い諸刃の魔法

ヒール：回復魔法

オールヒール：広範囲の回復魔法

ソニックムーヴ：音速の移動魔法

フラッシュムーヴ：アクセル+フラッシュムーヴの移動魔法

モード：バスター

ソニックシューター：光一が考えた魔法弾、兎に角スピードを重視した為追尾性が全く無い

ストライクバスター：なのはのデイベインバスターと比べ、破壊力、範囲は劣るが貫通性、飛距離、は高い

インフィニティ・ゼロ：なのはのSLBを参考に光一が考え出した収束砲撃魔法

モード：セイバー

インパクトブレイク：ブレイクシールドと同じ原理、武器同士がぶつかった時爆発する

フラッシュブレイク：高速で敵に近づき斬撃を与える

インフィニティ・ストライク：インフィニティ・ゼロの斬撃版チャージに時間が掛かるがその分破壊力があり、当たれば一撃必殺の威力

守る力（前書き）

作者「また、やっちまった!」

光一「いきなり何だよ?」

作者「いや、今回かなり長くなったなと」

光一「そんなに長いのか?」

作者「ああ、長い、実を言ってもっと短くなる筈だったんだか」

光一「じゃあ、何で長くなったんだ?」

作者「実はな、書いてる途中変なテンションになっちまって」

光一「変なテンションって（汗）」

作者「兎に角、今回長くなってしまったので読者の皆様には申し訳無いですが最後まで読んでいただけたら幸いです」

光一「俺からも、1つ宜しくたのむ」

守る力

光一「どう言う状況コレ？」

皆さん、おはようございます神崎 光一です、高町家で泊まり朝がやって来ました、普通ならベッドから出て顔を洗うなどしなくては いけません、しかし今それが出来ない状況になっています、何故 なら。

なのは「えへへ、光くん暖かいよ…スウスウ」

なのはが俺に真っ正面から抱き付き寝ている為です、しかも、しっかりホールドして

光一（ハア、マジで勘弁してくれ、こんな所恭兄に見つかったら殺される）

光一「オイ、なのは起きろ！朝だぞ」

光一がなのはを揺するが起きる気配が無い。

仕方ないので、無理やり引き剥がそうとするが、離れ無い。

光一「くっ！取れねえ本当になのはの力か？」

なのは「んん、ヤダ！」

光一「ヤダじゃねえよ！早く離れろ！」

しかし、なのはは一向に取れず、結局光一の方が諦めた。

光一「ハアハア、もう良い疲れた！なのはが起きるまで待つか、ん？視線感じるだが…」

光一はなのはが抱き付いている為、体が動かせ無いので、首だけ動かしドアの方を恐る恐る見た、そこには一番見られてはいけない人が今までに無い位良い笑顔で、コツチを見ていた。

光一「も、桃子さん！…え」と、居たんですか？」

光一が恐る恐る聞く。

桃子「アラ、私の事は気にせず続けてちょいだい」

光一「いや、何の事ですか？」

桃子「アラ、なのはとお楽しみだったんじゃ無いの？」

桃子が凄く良い笑顔で言ってくる、滅茶苦茶良い笑顔だな、クソ。

光一「茶化さないで下さいよ、ただなのはが引っ付いて、取れないだけですから、そうだ！桃子さん手伝って下さい、マジでなのはが取れないので」

桃子「光一くんも嘘を吐くなら、もうちょっとマシな嘘を吐いた方が良いわよ」

光一「へっ？嘘って、現になのはが俺に引っ付いてるじゃないですか」

光一は桃子にそう言って、自分のお腹の方を見た、しかしなのはもう自分のお腹の上には居らず、自分の隣で寝ていた。

光一「はっ？えっ？嘘！？」

光一は急いで桃子に言い訳しようと、桃子の方を見るが、もう手遅れだった。

桃子「さっき迄、なのはが光一くんの上に居て、光一くんは息が荒れてたって言ったらやる事は1つよね」

桃子の笑顔のレベルが更に上がっていた、そして、桃子の後ろの方で美由希が写真を撮り、その横には、恭也が居た。

恭也「コウウイッチ」

この瞬間自分の中で何かが、終わりを告げた。

暫くして、朝食の時間。

全員「いただきます」

高町家の全員と光一ユーノリスが席につき朝食を食べていると。

なのは「光くん、何だか疲れてるみたいだけど、大丈夫？」

なのはが心配そうに聞いてくる。

光一「ああ、大丈夫だ、ただ単にバーサーカーに襲われたただけだから」

なのは「う、うん分かった」

その後、普通に食事をしていると、光一は気になった事があるのか、リニスに聞いた。

光一「なあ、リニス？俺使い魔について余り教えて貰って無いんだけど、教えて貰って良いか？」

リニス「そうですね、では詳しく説明します、使い魔と言うのは昨日言った通り、主人の魔力で生きています、ですがただ魔力を貰う訳ではありません、主人に魔力を貰う代わりに、主人のサポートから主人の敵などと戦ったりします、言うなれば主人を守る盾です。

光一「猫のままで戦うのか？」

リニス「まあ、そう言う時もありますが、通常は、人型になって戦います。」

全員「人型！？」

なのは「リニスさん人になれるんですか？」

リニス「なれますよ、なりましようか？」

そう言うってリニスは人型になった。

リニス「どうですか？」

なのは「すごい、リニスさん人になったの！」

美由希「魔法って何でも有りね」

桃子「あら、可愛いわね」

士郎「なるほど」

光一「なあ、ユーノも人型になれるのか？」

光一はユーノもなれるのか聞いた。

ユーノ「いや、なれると言うより、僕は人の方が本来の姿だから」

なのは「えっ！？そうなの？」

ユーノ「うん、この姿は魔力を出るだけ抑える為だから」

リニスが人型なりその事に付いて話していると、士郎が気付いたのか、なのは達に言った。

士郎「もう、学校に行く時間じゃ無いかい？」

4人「ウソ!？」

時計を見るともう家を出ないと不味い時間だった、更に光一は、家に靴を取りに帰らなければいけない。

光一「マズ!なのは一旦帰る、桃子さん朝ご飯ありがとっございませ!」

光一はお礼を言って急いで家に帰った、その後なのはと合流し走っ

てバス停まで行つた。

光一「ふう、何とか間に合つた」

なのは「はあはあ光くん、はあはあ何であんなに走つたのに、息を切らしてないの？」

光一「なのはが運動不足なだけだつて」

アリサ「2人ともコツチよ！」

アリサが2人を読んだ。

なのは「アリサちゃん、すずかちゃんおはよう」

光一「2人ともおはようさん」

すずか「なのはちゃん、光くんおはよう」

アリサ「なのは、光一おはよう」

4人で挨拶をした後2人も座り雑談していた。

アリサ「そう言えば、動物病院の辺り凄い事になつてゐるのは達知つてゐる？」

アリサが2人に昨日の夜動物病院の辺りで事故が有つた事を聞いた。

なのは「そ、そうなの、知らない」

なのは「事故って昨日のジュエルシールドの事だよな」ボソボソ

光一「俺も知らないな」

光一「多分な」ボソボソ

なのはと光一は、2人に聞こえない様に話した。

すずか「でも事故なのかな？そこら中の壁や地面が砕けてたって聞いたよ」

アリサ「事故でもなければ、何なの？誰かが戦った後とか？まさか、そんな事あるわけ無いし」

すずか「わかんない、なのはちゃん達はどう思う？」

なのは「えっ？分からないかな、光くんは？」

光一「さあな、まあ分からない事考えても仕方ない」

アリサ「そうね！」

すずか「うん！でも、昨日のフレットさん大丈夫かな？」

すずかがユーノの事が気になったのか、なのは達に聞いて来た。

光一「すずかその事何だが、昨日コンビ二帰りに偶然拾って今家に居るから安心しろ」

すずか「そうなの、良かった、ねえ今度見に行つて良い？」

光一「ああ、良いぞ」

光一「それと、名前はユーノに決まったから」

アリサ「へエ、光一にしては、言い名前じゃない」

暫くして、学校に着きクラスメートと話していると、突然。

ユーノ「2人とも聞こえる？」

ユーノから念話 came。

なのは「ふえ！ユーノくん？」

アリサ「なのは？ユーノがどうしたって？」

なのは「な、何でも無いよ！」

ユーノ「2人とも、念話のやり方教えるね」

ユーノから念話のやり方を教えてもらい。

なのは「ユーノくんいきなりどうしたの？」

ユーノ「もし、何かあった時の為に、教えといた方が良いと思って」

光一「今じゃ無くて、家に帰ってからでも良かったんじゃない？」

ユーノ「ジュエルシードは何時発動するか分からないから」

リニス『もしもの為に教えておこうと今さっきユーノくんと話して』

ユーノとリニスが話合い今教えた方が良いと決まったのだ

なのは『そうだね、分かったユーノくんリニスさんありがとう！』

その後授業が始まり、何事も無く終わった。

なのは「無事に学校終わって良かったね光くん」

光一「そうだな」

2人はジュエルシードが発動する事無く、学校が終わった事を喜んだ。

光一「しかし、アリサとすずかは用事か」

なのは「仕方ないよ」

アリサとすずかは今日用事があるため、先に帰り光一となのはだけで帰っていた。

なのは「光くん？」

光一「何だ？」

なのはが光一に呼び掛けて来たので、光一も返事をした、だが光一は嫌な予感しかしなかった。

なのは「今、2人だけだね」

光一「そうだな、今2人だけだな、周りに人が居るけど」

なのは「でも、2人だけだよな」

光一「そ、そうだな」

やばい、俺の中の直感が今すぐ逃げろと警告している。

なのは「コレってOKって事だよな！むしろやらないといけないよね？」

光一「な、なのは落ち着け！」

なのは「目を充血させ、荒い息使いで俺に迫ってくる、はっきり言
って怖いです。」

光一（仕方ない、アレ使うか）

光一「落ち着かないと、口聞かないぞ」

光一がそう言うと、なのははこの世の終わりみたいな顔になり、落
ち込み始めた。

なのは「そんな…じゃあ、これから何を楽しみに生きて行けばいい
の？」

光一（いや、そこまで落ち込まなくても）

光一はなのはの落ち込み様に軽い罪悪感が生まれた

光一（ハア、俺もなのはに甘いな）

光一「なのは落ち込むなよ」

なのは「でも！」

光一「お詫びに、手ぐらい繋いでやるから」

なのは「本当に!？」

光一「ああ、ほら！」

光一はなのはに手を差し出した。

なのは「えいっ！」

なのはは、手を繋かず腕を絡めた。

光一「おい、なのは!？／／／／」

なのは「ダメ?／／／／」

なのはは可愛く、首を傾げて聞いてきた。

光一「恥ずかしいんだが／／／／」

なのは「我慢して!／／／／」

光一となのはは、真っ赤になりながら家に帰った。

ユーノ「2人ともお帰り」

光「ああ、ただいま／＼／＼」

なのは「うん、ただいまユーノくんリニスさん／＼／＼」

ユーノ「2人とも顔が赤いけど、大丈夫？」

光「ユーノ気にするな！／＼／＼」

なのは「う、うん！気にしないでユーノくん！／＼／＼」

ユーノ「？」

ユーノは何故2人の顔が赤いのか分からず、リニスは2人を微笑ましく見ていた、その時。

4人「！？」

なのは「コレってジュエルシード？」

光「ちっ！発動したか」

リニス「3人共急いで！」

4人は、ジュエルシードが発動したと思われる、神社に行った。

そこには、倒れている一般人と狼みたいな大型の生物が居た。

光一「おいおい、ユーノあれって？」

ユーノ「間違いない原生物がジュエルシードを取り込んだんだ、2人共昨日の奴より、数段も強いから気を付けて！」

光一「ああ！」

なのは「うん！」

光一「なのは！昨日みたいに封印するぞ！」

なのは「うん、でもどうやって変身するの？」

ユーノ「えっ！なのは昨日ちゃんと変身してたじゃ無いか！ほら、あれだよレイジングハートの発動ワードアレを唱えて！」

なのは「無理だよ！あんなに長い覚えられないよ！」

ユーノ「じゃあ、もう一回僕に続いて唱えて」

リリス「来ます！」

なのは「えっ！？」

なのはが狼の方を見ると、狼がコツチに向かって来ていた。

なのは「ふええええ！」

光一「なのは！」

狼が正になのはて接触しようとした時。

RH「プレテクション」

狼「ぐおーーー！」

レイジングハートがなのはを守った。

RH「マスター、セットアップを唱えて下さい」

なのは「レイジングハート？…分かった！レイジングハートセットアップ！」

なのはがセットアップを唱えると、なのはの服はバリアジャケットになり、手には、レイジングハートが握られていた。

ユーノ「詠唱なしで、セットアップした！？相変わらず何て素質なんだ！？」

リニス（ユーノくんが言っていたけど、確かに凄い素質、素質だけなら、あの子以上かも知れない）

リニスはなのはと自分が前まで、面倒を見ていた金色の髪の子を比べていた。

光一「なのは大丈夫か？」

光一が心配そうに、なのはに質問した。

なのは「大丈夫だよ！でも、どうしよう、どうやって動きを止めよ

う？」

光一「ああ、マジで速すぎて捕まえられないぞ」

RH「マスター、バインドを使いましょう」

なのは「バインド？」

RH「バインドは敵を動けなくさせる魔法です、敵がこちらに向かって来た時バインドで捕まえ封印しましょう」

なのは「分かったの！」

RH「タイミングはマスターにお願いします」

作戦も決まり、なのはがレイジングハートを構えた時、プレテクシヨンにぶつかったダメージが抜けた狼が丁度突っ込んで来た。

狼は速かったが、動きが単純だった為、簡単にタイミングを取る事が出来た。

なのは「今なの！」

RH「バインド」

レイジングハートがバインドを発動した瞬間、狼の動きが止まった。

ユ一ノ「なのは今だ！」

なのは「ジュエルシード封印！」

RH「シーリング」

なのはがジュエルシードを封印した瞬間、狼は犬に戻った。

なのは「あの人の飼い犬かな？」

光一「多分な、それにしても、俺今回全然役に立たなかったな」

光一は自分が役に立たなかった事に目に見えて落ち込んだ。

【なのはside】

なのは（光くんが落ち込んで、元氣付けで上げられない無いかかな？…そうだ！）

なのはは何か案が思い浮かんだのか、光一の目の前に来た。

光一「なのは？」

光一はなのはにどうしたのか聞いた。

なのは「光くん大丈夫だよ」

光一「つつ！」

なのはは光一を抱き締めた。

なのは「私を守れなかった事落ち込んでるんだよね」

光一「ああ、昨日あんなに守るって言うときながら今日何にも出来なかった」

なのは「ありがとう」

光一「俺は何にも出来なかったんだぞ！お礼何て言われる」でも！」

なのはが光一のセリフを止めた。

なのは「でも、守ろうとしてくれただから、ありがとう」

光一「なのは……なあ、これからも守らせてくれるか？」

なのは「うん！」

ユ一ノ「／／／／／」

リニス「アラアラ」

空気とかしていた2人は、片方は真っ赤になり、もう片方はニコニコしながら2人を見ていた、それに気付いた2人は。

2人「／／／／／」

今までに無いほど真っ赤になっていた。

なのは（うっはすかしいよ）

なのはが真っ赤になりながらそんな事を考えていると。

リニス「はっ！なのはさんよけて！」

なのは「えっ！？」

なのはは何かにぶつかり吹き飛ばされた。

【光 side】

目の前で、なのはが吹き飛ばされた。

光「なのは！？」

光「なのはの方へ駆け寄る。」

光「なのは無事が？」

なのは「うん、大丈夫でも、なにが？」

光「となのははぶつかって来た何かを見た。」

そこには、今さっき封印した狼の色違いが居た。

光「なっ！色違い？」

ユイノ「2人共、多分あの狼始めから2匹居たんだ」

光「なのはもう1回封印出来るか？」

なのは「うん！」

光一（次こそは、守る！）

光一はなのはを次こそは守ると心に決めた。

なのは「あれ？ウソ？無い？」

光一「なのははどうした？」

なのはが慌てているので光一は聞いた。

なのは「レイジングハートが無いの！」

光一「なっ！何処に？はっ！」

光一となのはがレイジングハートを見つけたが、狼の足元だった。

狼「グルル、グオーー」

狼は勢いを付け光一達の方へ、飛んできた。

ユ・リ「2人共逃げて！」

光一はなのはを抱えて横に飛び、避けた。

その後も光一はなのはを抱え必見に避け続けた。

ユ・リ「リニス何とか成らない？」

リニス「無理です、まだ万全では無い私が出ても、足手まといにな

るだけです」

ユーノ「そんな!」

リニス「私だって、マスターを助けたいです!でも今行ったら逆に迷惑になってしまう」

リニスは悔しいそうな顔をする、使い魔なのに主人を助けられないそれが、リニスにとって何よりの苦痛だった。

光一「くそ!何か手が無いのか?」

なのはを抱えて逃げている為、限界が近付いて来ていた。

なのは(光くん…)

なのは「光くん、私を話して逃げて!」

光一「何馬鹿な事言ってやがる!」

なのは「でも、今回こうなったのも私の責任だし、私の為に光くんが傷付く所見たく無いよ!」

光一「この馬鹿!俺はなお前を守ると決めたんだ、だから守る!例えば相手が俺なんかより強くても、それが俺の戦う理由だ!」

光一は、そう叫び、なのはの盾になるべくなのはの前に立った。

【リニス side】

光「それが俺の戦う理由だ！」

私は驚いた、9歳の少年が自分では、想像もつかない様な立派な事を言ったからだ、実を言うと私はマスターを少し舐めていた、普通の家に生まれ普通の暮らしをしている、ただ魔法の才能が有るただの子供だと思っていたからだ。

自分が前まで、面倒を見ていた金色の髪を持つ少女、彼女は少し複雑な環境に居た、そんな彼女に比べたら、ただ甘いだけの少年それだけだと思っていた、しかしどうだろうこの少年は立派に戦う理由があり、そして戦っている、それなのに私はこんな場所でくすぶっている、それがとても悔しかった。

リニス「何か、何かマスターを助けられる方法は？」

リニスが必死に方法が無いか探していると。

？「マスター私を、彼にお投げ下さい」

リニスの首輪から声がした、正確にはリニスの首輪に付いているデバイスから。

リニス「何で、このデバイスが？」

リニスが驚くのは当たり前である、彼女が持っているデバイスは彼女が作っておきながら、マスターである彼女にも何の反応も示さなかったのだから。

？「マスター彼が死んでしまう前に私を彼に」

リニスは「はっ！」となるマスターはなのはさんを守り体中が傷だらけなのだ。

リニスは人型になり、デバイスをマスターに投げた。

【光ーside】

あれから、かなりの攻撃を受けた、体中から血が流れてマジで苦しい、だが、なのはを守りきると決めた以上絶対に守る

なのは「光くん！もう止めて！」

なのはは泣きながら言うてくる。

光一（たく、泣いてんじゃねえよ）

光一はそんな事を考えていた。

しかし、狼は一向に倒れない光一に痺れを切らせたのか、溜めに入り次で決めるつもりでいた。

光一（あゝ、次で決めるつもりかよ、耐えられるかね？）

狼「グオーー！」

狼が光一にタックルを決めようとした時。

リニス「マスターコレを！」

リニスの声が聞こえた様な気がした。

？「プレテクション」

光・な「！？」

光一の前にプレテクションが張られ狼の攻撃を防いでいた。

狼はモロにプレテクションと衝突し吹き飛び、光一の目の前には、青いビー玉の様なデバイスが浮かんでいた。

？「初めまして、使用者さん」

光一「デバイスか？」

？「はい、あなたにはマスターの資格があります」

光一「マスターの資格？」

？「あなたは、彼女を必死に守ろうとしました、それが資格です」

狼「グルル！」

光一「！？ちっ！もう起き上がりやがった」

？「速く契約をして下さい」

光一「契約ってどうやったら良いんだ？」

？「私に名前を与えてくれれば、良いだけです、私には名前が有りませんから」

光一「名前を与えれば良いんだな？」

狼がこちらに向かって走って来る。

光一（コイツの名前…）

光一「よし！決めた！」

？「では、私の名前は？」

光一「お前は、俺と一緒に大切な物を守る盾であり剣」

狼が物凄い勢いで向かってくる。

光一「神話時代の最強の盾」

狼が俺に接触しようとした時。

？「その名は？」

光一「イージス！」

光一がデバイスの名前を叫んだ瞬間、デバイスが輝きそこに居た全員の目の前が真っ白に染まった、その後光が収まり光一を見て見ると。

そこには、騎士の様な純白の鎧のバリアジャケット、その手には重厚な盾もつ片手には、1メートル位の長さの剣が握られ狼の攻撃を防ぐ光一が居た。

なのは「光くん？」

なのはが心配そうに聞いてくる。

光一「安心しろ、俺は大丈夫だから」

狼「グルル、グオーー！」

攻撃を塞がれた事で次の攻撃を繰り出してくる。

なのは「光よけて！」

なのはが叫ぶ、だが、光一は避けずその攻撃を盾で防いだ。

光一「かなり頑丈だな」

イー「マスター当たり前の事を言わないで下さい、私はマスターの大切な物を守る盾ですよ」

イージスが当たり前の様に言う。

光一「確かに、お前の言うとおりだ、弱い盾じゃ何も守れないからな、さて、俺の大切な奴を傷付け様とする愚か者を討つとしますか」

光一はそう言って剣を構えた、その瞬間剣に魔力が溜まり始めた。

光一「おい、俺の大切な奴を傷付けたんだ、多少の痛みは覚悟しろよ」

狼は俺の攻撃に危険を感じたのか、逃げ出した。

光一「逃がすかよ！ソニック・エッジ！」

光一は高速の一撃を放った、その一撃は一瞬にして狼に当たり爆発した、そして狼は犬に戻り、ジュエルシールドが排出された。

光一「ジュエルシールド封印！」

イー「シーリング」

光一はジュエルシールドを封印し、イージスを待機状態に戻した、その後直ぐ光一は倒れてしまった。

なのは「光くん！？」

ユーノ「光一！？」

リニス「マスター！？」

全員が光一に近付いて光一の事を心配した。

なのは「ユーノくん！光くんは大丈夫なの？」

ユーノ「待つてなのは！えーと良かった大丈夫みたい、ただ疲れて眠ってるだけみたい」

なのは「良かった」

なのはは眠っている光一を抱きしめ光一の無事を喜んだ。

リニス「目立った傷も、この程度なら治癒魔法で何とかあります」

なのは「光くん本当に良かったの」

光「なのはは…守る…スウ」

なのは「ありがとう光くん」

光「なのはに抱きしめられ、安らかな顔で寝ていた。

守る力（後書き）

次回「????」

作者「すいませんタイトルがまだ決まって無いので更新した時のお楽しみに

覚悟前編（前書き）

スイマセン二部構成になってしまいました。

覚悟前編

神社でジュエルシードを2つ封印し数日が立つたある日、光一達はなのはに誘われて、土郎のチームのサッカー観戦に来ていた。

光一「何でこうなった？」

光一は今、サッカーのユニフォームを着て、フィールドに立っていた。

何故こんな事になったのか、1から説明しよう。

ジュエルシード探しを深夜までやった翌日、学校が休みの為俺は情眠を貪っていた、その時。

《バターーン！》

ユ・リニス「なっ何！？」

俺の部屋のドアが勢い良く開けられなのはが入って来た。

光一「……………なのは……………何の様だ？俺凄く眠いんだけど」

なのは「光くん！デートしよー！」

光一「マジでハイテンションだな、と言うよりも、なのは昨日俺と一緒にジュエルシード探ししてたよな？お前眠く無いのか？」

なのは「だって、光くんとデート出来るんだよ！寝てなんていられ

ないよ!」

なのはが興奮気味に言う。

光一「待て、俺はまだデート行く何て言っていないぞ」

なのは「でも、せっかくの休みなんだよ、デートしなかったら何するって言うの!?!」

光一「他にもあるだろ!」

なのは「あっ! そうだよね光くん、私忘れてた」

なのははそう言い、光一のベッドに入ってきた。

光一「なのは! お前何やってんだ?」

なのは「添い寝?」

光一「ベッドから出る」

なのは「やだ!」

光一「出ろって言うてんだろ!」

なのは「だが、断る」

光一「一週間無視するぞ」

なのは「すいませんでした!」

なのははベッドから、ソニックムーヴクラスの速度で出て、土下座した。

ユーノ「速!」

なのは「光くんそれだけは、勘弁して下さい」

光一「もう良いから顔上げろ」

なのは「光くん許してくれるの?」

なのはが、光一の顔を伺いながら聞いてくる。

光一「もうしないなら許す」

なのは「光くんごめんなさい!」

なのはは、光一に泣き付きながら誤る。

光一「分かったから、もう泣くな」

ユーノ「光一、なのはに本当弱いね」

リニス「マスターはなのはさんに甘すぎます」

光一「言わんでくれ、俺も分かってんだから」

なのはが泣き止み、光一はなのはに聞いた。

光一「なあ、なのは? 今日誘った本当の理由は?」

なのは「だから、デー「理由は？」今日お父さんの、サッカーチームの応援です」

光一が睨みながら、理由を聞くとなのはは直ぐに吐いた。

光一「なるほど、試合今日だったか」

なのは「うん！」

光一「で、その試合を見に行こうと？」

なのは「そう」

光一「分かった、準備するから外でまってる」

なのは「部屋で待ったら駄目？」

光一「お前を部屋で待たすと、色々危険な気がする」

なのは「変な事しないよ！ただ、じっくり舐め回す様に見るだけだよ！」

光一「ハア…なのは良いから外に出ろ、後ユーノ、リニス外でなのは見張っていてくれ」

光一が2人になのはを見張る様に言う。

ユーノ「光一も大変だね」

なのは「ブー」

なのは口を3にして、不満そうにしていた。

光一達がグランドに着き、周りを見ると人が沢山居た。

光一「げっ！こんなに人居るのかよ」

ユ一ノ「凄いね」

リニス「それだけ人気有るのでしょうか」

光一達は人が沢山居る事に驚いていた。

なのは「えーと、何処かな？」

なのは何かを探していた。

光一「なのは、何探してんだ？」

なのは「アリサちゃんとすずかちゃんが来てるんだけど、何処に居るか分らないの」

光一「2人共来てるのか？」

なのは「うん、でも待ち合わせ場所が分からなくて」

なのはが2人を探して周りをキョロキョロしていた時。

アリサ「なのはー、こっちよ！」

アリサの方が先に、なのは達を見つけた様で、呼んできた。

なのは「居た！」

光一「みたいだな」

なのは達は合流し、みんな一緒に座った。

アリサ「2人共おはよう」

すずか「おはよう」

なのは「おはよう」

光一「うーす」

4人で挨拶した後試合が始まるまで、雑談していた。

アリサ「光一、ユーノ飼ってるのは知ってるけど、あんた猫まで飼ってるの？」

アリサがリニスについて聞いてくる。

光一「あれ、言って無かったつけ？」

すずか「ううん、教えて貰って無いよ。」

光一「そうか、悪い家で飼い始めたリニスだ」

光一はリニスの紹介をした。

アリサ「へー、可愛いじゃない」

すずか「うん、毛並みも良くて良い猫だね」

リニス「にゃ〜」

2人はリニスを可愛いがっていた。

なのは「もう直ぐ試合始まるみたい」

なのはが、試合がもう直ぐ始まる事を3人に伝えた。

光一「おっ、始まるのか？」

試合が始まるのを、光一達が待っていると、士郎が近づいて来た。

士郎「光一くん来るのを待っていたよ」

光一「へっ？」

士郎「さあ、こっちに来てユニフォームを着てくれ」

光一「し、士郎さん？訳が分から無いんですけど」

光一は訳が分からず、士郎に聞いた。

士郎「ん？なのはから聞いて無いかい？」

光一「何をです？」

士郎「今日、欠員の代わりに試合に出て欲しいって？」

士郎はそう一言告げた。

光一「はっ？聞いてませんよ！」

士郎「なのはに今朝お願いしたんだが？」

光一はなのはを見たが、なのはは目を逸らした。

なのは「ふーふーふー」

吹けない口笛を吹きながら。

光一（アイツ！）

光一はなのはに若干の怒りを覚えた。

なのは「怒って…る？」

光一「当たり前だ！」

なのは「ごめんなさい」

なのははシュンとなりながら謝った。

光一「もう良い、でもこれから、ちゃんと言えよ」

なのは「うん」

光一となのはが念話で話を終え、光一は士郎に言った。

光一「士郎さん、分かりました試合に出ます」

士郎「そうか、ありがとう」

士郎はお礼を言いながらユニフォームを渡した。

その後、ミーティングを済ませフィールドに立った、ポジションはFW。

《ピーーーーーー！》

ホイッスルが鳴り、試合が始まった。

試合序盤、俺にボールが回って来た、ゴールまでの距離15メートル俺はそこからロングシュートを決めた。

キーパー「へっ！？」

《バスン！》

ボールがネットに突き刺さった、キーパーは一步も動く事が出来なかった。

観客「わーーーーー！」

アリサ「アイツ凄いわね」

すずか「う、うん」

なのは「光くん、凄い！」

アリスは光一のスーパープレイに呆れ、すずかは驚きなのはは自分の事に喜んでいた。

その後も光一がスーパープレイをして、4-0で前半を終えた。

ユーノ「サッカーって面白そうだね」

なのは「ユーノくんの世界にはサッカー無いの？」

ユーノ「似たようなスポーツは有るけど、僕は発掘ばかりしてたから」

ユーノが自虐的に言う。

なのは「なら、ユーノくんが故郷に帰ったら、みんなと一緒にやれば良いよ」

ユーノ「うん、そうだね」

《ピーーーーー！》

リニス「後半戦始まったみたいですね」

光一「何でこうなった？」

最初に戻る

後半戦が始まり、光一にボールが回って来たが、光一は攻められな
いでいた。

光一「くっ！」

光一に3人もマークに入られ、シュートもパスも出来ないのだ。

光一（ちっ、流石に3人はキツいか）

結局、何もする事も出来ず、時間が流れて行き、残り2分を切った
所で光一にまた、パスが回って来たがまた3人にマークされ身動き
が取れないでいた。

アリサ「何なのよ、アイツら！」

なのは「光くん、頑張って！」

なのはは光一を必死に応援していた。

光一（流石にこのまま終わるのはやだな）

光一は、ボールを無理やり蹴り、ゴールポストに当てた。

敵DF「外した！」

DFが外した事を喜んでいると。

光一「バーカ」

光一が高くジャンプしていた。

敵DF「なっ!？」

DFが驚いていると、光一は空中で背を向けてそのまま、オーバーヘッドシュートを決めた。

そのまま、ホイッスルも鳴り試合が終了した、結局試合は5-0で圧勝した。

試合が終わり、翠屋で打ち上げをしていた。

打ち上げ中、4人は一緒に座りユーノとリニスを可愛いがっていた。

すずか「2匹共可愛いね」

アリサ「本当、賢いし」

ユーノ「キュ」

ユーノ「2人共助けて!」

ユーノはアリサに力一杯抱きしめられていた、例え相手が小学生の女子だと言ってもフレットには死活問題になる。

なのは「えーと、ユーノくんごめんね」

光一「まあ、我慢しろ」

なのはと光一は、ユーノの助けを断った。

ユーノ『そんな!』

リス『ユーノくん、諦めなさい! 動物で居る内はそう言う事が当たり前なんです!』

光一達はリスを見ると、すずかに撫でなれながら、達観した顔になっていた、まるで全て諦めた様な。

リスお前前の主人の所で、何が有ったんだ?

その後も、ユーノ達を可愛いがりながら雑談していると、光一の携帯がなった。

光一「ああ、わかった取りに行くよ、じゃあな」

光一は電話を切った。

なのは「誰から電話?」

光一「友達、今から会いに行ってくるから、帰るわ」

アリサ「そう、じゃあ明日学校で」

すずか「また明日ね」

光一「また明日な」

光一達は、挨拶をしているとなのはは。

なのは「光くん、浮気して無いよね」

また、馬鹿な事言い始めた。

光一「馬鹿だと思つてたがここまでだと思わなかった」

なのは「だって、心配なんだもん！」

光一「そもそも、浮気つて俺ら付き合つて無いだろ！」

なのは「まだ付き合つて無いだけだよ、それに私の中では、もう付き合つてるつもりでいるもん！」

光一「あー、頭痛い」

ユーノ「光一、大丈夫？」

ユーノが心配そうに聞いてくる。

光一「ああ、大丈夫だ」

光一「なのは、浮気かどうかは置いといて、相手は男だ、それにCD取りに行くだけだから」

なのは「本当？」

光一「ああ、本当だ」

なのは「うーん、分かった」

なのはもやつと納得してくれた。

アリサ「光一、あんた本当になのはに愛されてるわね」

光一「その愛が痛いんだよ」

光一は胃を押さえながら言う、最近なのはとのやり取りに胃が痛い、胃薬を飲もうか検討中である。

俺はそのまま友達の家に行き、CDを借り家に帰ろうとした時。

光一「ジュエルシードか!？」

ジュエルシーが発動したのを感知した。

光一「近いな」

光一が、今居る場所から近かった為、周りに誰も居ない事を確かめてから。

光一「イージス行けるか？」

イー「勿論です、マスター」

光一「イージスセットアップ」

イー「了解しました、マスター」

光一はバリアジャケットを着て、ジュエルシードが発動した場所に行った。

光一「!？」

光一は絶句する、辺り一面木の根っ子で覆い尽くしており、それにも街の方へ広がっていた、そして、中心にビルの様に高い木が立っていた。

光一「おいおい、コレもジュエルシードの力なのかよ」

光一が、ジュエルシードの力に呆れていると。

イー「マスター、なのは嬢が近くに居ます」

光一「なのはが居るのか？」

イー「はい、西に300メートル行った所に」

光一は西に300メートルの場所を見た、そこにはイージスの言った通りなのはが居て、ユーノとリニスも居た。

光一は直ぐになのはと合流したが、なのはの様子が変わった。

光一「なのは？」

なのは「ごめんなさい、ごめんなさい！私の性で」

なのはは、何は自分を責め泣いていた。

覚悟前編（後書き）

次回「覚悟後編」お楽しみに

覚悟後編（前書き）

後編投稿します。

最後まで読んで頂けたら分かりますが、最後オリジナル展開になります。

覚悟後編

ユーノ「光一、なのはが!」

光一「おい、なのはどうした!？」

光一は、なのはが何故泣きながら誤っているか、分からないでなのはに聞いてみたが。

なのは「ごめんなさい、私気付いてたのに、ごめんなさい」

なのはは、光一にさえ気付かないほど泣きじゃくっていた。

光一「ユーノ、なのはが何で泣いているか分かるか」

ユーノ「それは…」

ユーノは何かあるのか、苦しげな顔になる。

リニス「マスター、私が説明します。」

ユーノ「リニス、でも…」

リニス「このまま黙っていても、何も解決しません」

光一「リニス、何があったんだ?」

リニス「実は」

時間を遡り、光一が翠屋でなのは達と別れた所。

なのは「ウー、光くん帰っちゃった」

なのはは、光一が帰った事を不満そうに言う。

アリス「仕方無いでしょ、光一だって用事が有るんだから」

なのは「でも」

すずか「ふふ、なのはちゃん本当に光一くんが好きなんだね」

なのは「うん／＼／／」

なのはは、照れながら答える。

その後も、雑談をして時間を過ごしていると、サッカーチームの打ち上げも終わって帰る時間になった。

【なのはside】

アリスちゃんとすずかちゃん、用事が有る為帰ってしまった。

ユーノ「ねえ、なのは？眠そうだけど大丈夫？」

リニス「疲れが出てきたのかもしれませんが、今日はもう休んだ方が良くないかもしれません」

ユーノちゃんとリニスさんが、私の事を心配そうに言う。

なのは『確かに、疲れちゃったかな』

ユーノ『もう寝た方が言いよ』

なのは『うん、そうだね』

私は、お店から家に帰ろうと立ち上がった。

なのは「えっ!？」

リニス『なのはどうしたの?』

ユーノ『どうかした?』

なのは(ううん、そんな訳無いか)

私は、サッカーチームの1人がジュエルシードを持っている様な気がしたが、そんな事有るわけ無いと勝手に決めつけた。

なのは『何でも無いよ』

私は、そのまま帰りベッドに入った。

リニス「服を着替えないと、シワになってしまいますよ」

なのは「うん…少し眠ったら…着替える…ね」

私が、眠ろうとしたその時。

3人「ジュエルシード!？」

ジュエルシードの発動を感知した。

私が、その場所に行くとそこは大きな木が有り、街を破壊していた。

なのは（何コレ？）

ユーノ「ここまでジュエルシードの力を引き出すなんて、どれだけ強い願いなんだ！？」

リニス「ここまでだと、無機物や動物では無理です！」

ユーノ「まさか、人が？」

リニス「多分ですが…」

なのは（人がジュエルシードを使った…まさか！？）

なのはは、自分がジュエルシードを持って無いと勝手に決めつけた男子を思い出した。

なのは（そんな…私性でこんな事に）

なのはの顔が真っ青になって行く。

ユーノ「なのは、真っ青だけど大丈夫？」

【なのはside】終わり

なのは「わ……せ……で……」

なのはは俯きながらボソボソ何かを言った。

ユーノ「え？」

なのは「私の性でこうなったの、私ジュエルシードに気付いてたのに！」

ユーノ「な、なのは！」

なのは「私がもっとしっかりしていれば、こんな事にならずに済んだのに！」

なのはが泣きながら言う。

ユーノ「なのはの性じゃ無いよ、僕も気付かないといけなかったのに気付かなかったから」

リニス「そうです、なのはさんの性じゃ無い」

2人はなのはのフォローをする。

なのは「でも、私勝手に決め付けて、ごめんなさい！」

ユーノ「なのは……」

光「なのは？」

リニスの説明が終わる。

光一「なるほど、なのははジュエルシードに気付いていたかもしれないって事か…」

ユーノ「光一、なのはだけの責任じゃ無いんだ、僕たちにも責任が」

リニス「マスター、私にも責任が」

光一「いい加減にしろ！」

2人「!?!」

光一は2人に怒鳴った。

光一「底い合いをしてんじゃねえよ！」

リニス「すいませんマスター」

ユーノ「ごめん…」

光一「後は、なのはか」

光一はなのはに近づき、なのはの正面に立った。

光一「なのは！」

なのは「ヒック…光くん？」

なのははやっと光一に気付いたのか、顔を上げた。

光一「何時まで泣いているつもりだ？」

なのは「でも！私のせ《バシーン》え？」

光一はなのはが言い終わる前に、なのはの頬を叩いた。

ユーノ「光一！？」

なのは「光…くん？」

光一「いい加減にしろよ…なのは」

光一はなのはを睨みながら言う。

光一「何時まで自分を責め続けてる、自分を責め続けてジュエルシールドが止まるのか？」

光一「お前には、先ずやる事が有るだろ、何時までも泣いてんじゃねえよ！」

なのは「やる事…ユーノくん！あれどうやって止められる？」

なのはは、涙を拭いてユーノに止める方法を聞いた。

なのは（そうだよ、泣くならいつでも出来る、先ずはジュエルシールドを封印しないと）

ユーノ「アレを何とかするには先ず、ジュエルシールドの場所を探さない」と

リニス「ですが、アレから探すのは至難の業です」

なのは「それでも、やらないと！レイジングハート行ける？」

RH「問題有りませんマスター」

レイジングハートは自信満々に言う。

RH「私とマスターに出来ない事は有りません」

なのは「レイジングハートありがとう」

レイジングハートはそう言うと、ジュエルシードの場所をサーチし始めた、そして直ぐに。

なのは「見つけた！」

ユーノ「ウソ！？速い」

ユーノはなのはがジュエルシードの場所を見つける速さに驚いた。

なのは「でも、木が邪魔で封印が届かない！」

光一「なら俺が、イージスバスターモード！」

イー「了解しました、バスターモードに切り替えます」

光一はイージスを、バスターモードにした。

光一「届かないなら、届かせる」

光一「イージス行くぞ、ストライクバスター！」

光一は、砲撃を放ち、木の中心まで貫いた。

光一「なのは、今だ！」

なのは「うん、ジュエルシード封印！」

なのはが、ジュエルシードを封印し木が無くなった。

なのは「街が…めっちゃくちやになっちゃったね」

なのはが落ち込みながら言う。

リリス「なのはさん…」

光一「なのは、もっと早く言うべきだったのかも知れないが、どんな力を使うにしろ覚悟が必要になる」

なのは「覚悟？」

光一「ああ、人は万能じゃ無いだから失敗もするし後悔もする自分がちゃんとしていればこんな事にはならなかったと言う事も有るだろう、だから覚悟が要るでも俺達には力が有る失敗したなら、次に同じ失敗をしない様にする事が大事なんだ」

なのは「光くん…よし、私決めた！今まではユーノくんの為にジュ

エルシードを集めてたけど、今度からは自分の為に集める、もうこんな事にならない為に」

なのはは決意した。

夜ビルの屋上

少女？「やっぱり、ここに有るみたいだねジュエルシード」

狼？「そうだね、後他の魔導師の匂いもする」

少女？「ジュエルシード集めてるのかな？」

狼？「多分ね、でも………が負ける事は無いね」

ビルの屋上に嘖く風で名前が聞き取れなかった。

少女？「じゃあ、行こうか」

狼？「ああ」

少女と狼が屋上から、飛び立とうとした時。

光一「おっと、待ってくれるか」

少女・狼「誰！？」^{だい}

光一「只の魔導師だよ」

そこには、光一が立っていた。

覚悟後編（後書き）

次回「接触」お楽しみに

接触（前書き）

最新話更新します。

作者「今回、ぶっちゃけやつちまったなと」

作者「オリジナル展開にする為にやりすぎましたが後悔はしていません」

接触

【フェイトside】

光一「只の魔導師だよ」

いきなり現れて、魔導師だと言って来た私と同じ年位の少年。

フェイト（全く気配を感じなかった）

気配を感じなかった為、かなりのレベルの魔導師だとわかった。

フェイト「管理局の人ですか？」

光一「いや、管理局は関係無い」

私が管理局の人間を確認すると、少年は管理局と関係無いと言ったが、怪しいこのレベルの人が管理局と何にも関係が無いなんて。

フェイト「じゃあ「自己紹介がまだだったな」」

光一「俺の名前は神崎 光一、相棒の名前はイージスこの前魔導師になったばかりの新人だ」

いきなり自己紹介してきた少年、この前魔導師になったばかり？有り得ない、だって気配無く近寄れるなんて一流の魔導師でも難しいのに。

フェイト「嘘を付かないで下さい、最近魔導師になったばかりの人

に気配を消す芸等なんて無理です！」

光一「いや、別に魔導師じゃなくても気配位消せるだろ、それに俺
気配消した覚え無いぜ、なあユーノ」

ユーノ「うん、消した覚えは無いね」

彼がそう言つと、彼の肩の方から動物が出て来た。

フェイト（使い魔かな？）

ユーノ「自己紹介するね、僕の名前はユーノ スクライア今はこんな
姿になっているけど人間だよ」

フェイト（使い魔じゃ無かったんだ）

光一「じゃあ、そっちの自己紹介お願い出きるか？」

私の自己紹介、彼に私の名前を言ってしまうって良いんだろうか、ま
だ彼の素性も分かった訳じゃ無いのに。

光一「ほら、5秒以内に自己紹介する！」

フェイト「ふえ！？」

光一「5〜4」

フェイト「えっ！？え〜と」

光一「3〜2〜1」

フェイト「フェイトです！…あっ」

アルフ「フェイト！？何自己紹介してるの？」

フェイト「だって、いきなり数を数え始めたんだよ！」

フェイトは涙目で答える。

光一「ぷっ、あはは、そうかフェイトって言うのか」

彼は、私が引かなかったのが面白かったのか笑っている。

フェイト「引っ掛けましたね！」

光一「悪い、別に悪気あった訳じゃ無いさ」

フェイト「うっ」

光一「でっ、ちゃんと自己紹介してくれるか？」

フェイト「フェイト テスタロッサ、魔導師です私のデバイスはバルディシュ」

アルフ「…私の名前はアルフ、フェイトの使い魔だよ」

【光一 side】

光一「やっと自己紹介してくれたか」

俺は、彼女達が自己紹介してくれた事に安心した、だって自己紹介しないと先に進めないだろ。

光一「フェイトか…良い名前だな」

フェイト「ふえ！？／／／／／」

フェイト（何でだろう？彼に誉められて嬉しいって思える）

フェイトの顔は真っ赤になっていた。

光一「どうした？」

光一（フェイト顔が真っ赤だが風邪か？）

光一は何故フェイトが真っ赤になっているのか分かって無かった。

今は関係無いが高町家のある人物はこの瞬間。

なのは「はっ！今光くんがフラグ立てた気がするの！」

相変わらず、色々飛んでいた。

フェイト「そ、それで、私に何の用ですか？あなたもジュエルシードを探しているんですか？」

フェイトは、光一に高圧的に質問する。

光一「まあ、落ち着け一気に質問されても困る」

フェイト「じゃあ、先ずジュエルシードとあなたは関係有るんですか？」

光一「有るよ、ユーノの手伝いで集めてる」

フェイト「…次に、私に何の用ですか？まさかジュエルシード集めの邪魔になるから消しに来たんですか？」

光一「……リニス」

光一はフェイトの問いに対し沈黙の後、自分の使い魔の名前を告げた。

フェイト「！？あなたはリニスを知っているんですか？」

フェイトは我を忘れて光一に詰め寄った。

アルフ「あんた、リニスを知っているのかい？」

光一「知っているも何も今は俺の使い魔だし、それとフェイト近い」

フェイト「えっ？」

フェイトは今自分の状況を冷静に見てみた。

フェイトと光一の距離は0で端から見れば、フェイトが光一にキスをしている様に見える。

フェイト「////////」

光一「たく、それでさっきの問いだが、俺はリニスにフェイトが来ている事を聞いて、リニスに会わせる為会いに来た訳だ」

ユーノ「リニスから、君が前魔法の勉強を教えて貰っていた事を聞いてたんだよ」

ユーノが補足する。

フェイト（リニス…）

フェイトは、まだリニスに魔法を教えて貰っていた頃を思い出していた。

アルフ『フェイトコイツらの事信じるの？』

アルフはフェイトに念話で聞く。

フェイト『でも、リニスの事や私が魔法を学んでいた事知ってたし、多分本当だよ』

光一「リニスに会うか？」

フェイト「……お願いします」

光一とユーノはフェイトとアルフを連れて帰って来た。

リニス「フェイト久しぶりですね」

フェイト「…リニス」

フェイトはリニスに抱きついた。

フェイト「いきなり消えて心配したんだよ」

リニス「ごめんなさいフェイト」

フェイト「無事だったなら良いの」

その後、フェイトはリニスと話落ち着いた後。

リニス「フェイト…あなたはジュエルシードを集めてるのですね？」

フェイト「…うん」

リニス「プレシアの為ですか？」

光一（プレシア？）

フェイト「そう、お母さんが望んだから」

リニス（プレシア…あなたはどこまで…）

リニスは悲しそうな顔になる。

リニス「フェイト、答えは分かっていますが聞きます、ジュエルシードを集めるのを止めますか？」

リニスはフェイトに聞く。

フェイト「それは無理、お母さんのお願いだから」

リニス「分かりました、ならフェイトあなたは私の敵と言う事になります」

フェイト「…リニス」

リニスとフェイトの間に不穏な空気が流れる。

光一「ちよつと待った」

光一が二人の間に割って入った。

リニス「マスター？」

光一「別に敵対する必要無いだろ？」

ユーノ「どう言う事？」

ユーノが光一に聞く。

光一「目的は違っても、ジュエルシードを集めている事には違い無いんだから、一緒に集めれば良いだけの話だろ？」

アルフ「あんた分かってるのかい、私達は敵何だよ？」

光一「誰が敵って決めたんだ？」

アルフ「それは…」

光一「それに、ジュエルシードを集める要員が増えるのは凄く有り難い」

ユーノ「でも、集めた後はどうするの？」

光一「集めた後、試合をして賭ければいいさ、ユーノどうだ？」

ユーノは暫く考え。

ユーノ「光一が良いなら」

光一「そっちは？」

リニス「ハア、マスターに従います」

フェイト「構いません」

アルフ「フェイトが良いなら、あたしも良いよ」

全員から承諾を得た。

光一「よし、決まりだな」

リニス「なのはさんには？」

リニスはなのはに聞かなくて良いのか聞く。

光一「もう遅いし、明日の朝にでも聞くよ」

フェイト「なのは？」

光一「ああ、もう1人の協力者」

フェイト「そうなんだ…女の子？」

フェイトが光一に確かめる。

光一「ああ、女の子だけど？」

フェイト「ふん、そうなんだ」

フェイトが不機嫌そうに答える。

光一「どうかしたか？」

フェイト「何でも無い！」

光一「？」

リニス（マスターはもう少し、女性の気持ちを知るべきかも知れませんがね）

リニス「そうだ、フェイトあなたは何処に住んでいるんですか？」

フェイト「隣のマンションだよ」

リニス「フェイトとアルフで？」

フェイト「うん…？」

フェイトは一体何を聞いているのか分からなかった。

リニス「聞きますけど、食事は？」

フェイト「ちゃんと食べてるよ、ねっ、アルフ？」

アルフ「うん」

リニス「どんな食事ですか？」

フェイト「これだよ」

フェイトが取り出したのは、○ロリー○イトだった。

リニス「ハア…やっぱり」

光「え〜と、マジ？」

ユーノ「流石にコレは…」

3人は呆れていた。

リニス「ちゃんと食事を取らないと駄目じゃ無いですか！」

リニスはフェイトに説教し始めた。

フェイト「でも…料理出来ないし」

リニス「どうしましょうか？」

リニスがフェイトの食事の事で悩んでいると。

光一「なあ、リニス？」

リニス「何です、マスター？」

光一「フェイトを此処に住ませれば良いんじゃないか？」

光一は案を出した。

リニス「マスター！？本気で言ってるのですか？」

光一「ああ、家ならちゃんと飯食えるし、近くに居ればジュエルシードに対応出来るだろ？」

リニス「しかし…」

光一「フェイトはどうだ？」

フェイト「良いのかな？」

リニス「早苗様や一様には何て言つつもりですか？」

光一「大丈夫だって、多分だが喜ぶぞ」

光一は両親にフェイトの事を伝えた。

早苗「きゃー！あなた見て可愛いわ」

フェイト「／／／／」

今フェイトは早苗に抱きしめられている。

光一「なつ、言ったる」

3人「……………」

この状況を見て、リニス、ユーノ、アルフの3人は見事に固まっていた。

光一「母さん昔から、娘が欲しいって言ってたからな」

ユーノ「でも流石にやりすぎじゃ無い？」

光一「まあ、本人もそんなに嫌がって無いし良いんじゃないか？」

早苗「あなた！もっと写真撮って」

一「ああ、分かった」

フェイト「あう／／／／／」

フェイトは終始真っ赤になっていた。

こうして、光一達は新しい協力者を得た。

接触（後書き）

次回「ライバル」お楽しみに

ライバル

【ユーノside】

ユーノ（突然ですが、修羅場です）

皆さんいきなり過ぎて何の事かと思われるかもしれませんが、はっきり言って僕も分かってません。

分かるとすれば、光一がバインドで何重にも拘束の上に正座をさせられなのはとフェイトがにらみ合ってます。

事の発端は今朝なのはが光一を起こしに来た時です、普段は寝坊ばかりしているなのはがこの日に限って早起きをして、光一を迎えにきました。

回想スタート

《カチャ！ギーー》

なのは（夫を起こすのは妻の役目）

なのは「光くん、起こしに来たよ！」

なのはは扉を開け、光一の部屋に入って来た。

光一「んゝ…なのはか？」

なのは「そうだよ」

光一「…何か用か？」

なのは「夫を起こすのは妻の役目だよ」

光一「今の冗談は聞かなかった事にしてやるから、本当の事を言え」

今は寝起きの為、冗談を聞く余裕が無い。

なのは「うー、本気なのに」

光一「良いから言え」

なのは「何だか嫌な予感がして…」

光一「嫌な予感？」

なのは「うん、光くんが浮気している様な」

果てしなくどうでも良い予感だった。

光一「なあ…なのは浮気の意味知ってるか？」

光一はなのはに浮気の意味を聞く。

なのは「知ってるよ、どうして？」

光一「俺達の関係上浮気何て言葉使わないって」

なのは「そんな…私とは、遊びだったの？」

なのはは人様には聞かせられないセリフを言った。

光一「なのは…間違っても誰かの前でそのセリフを言つなよ」

なのは「私とは遊びだったなんて…光くん私への愛は何処に行ったの？」

一旦暴走を始めたなのはは、ちよつとやそつとでは止まらない。

俺がなのはを説得していると。

《ガチャ》

リニスが入って来た。

リニス「マスターおはよう御座います」

光一「リニスおはよう」

2人は朝の挨拶をする。

リニス「なのはさん、どうかしたんですか？」

リニスは光一に詰め寄るなのはが気になったのか光一に聞いた。

光一「いや、気にするな何時もの事だ」

リニス「分かりました」

リニス「はそう言ってキヨロキヨロ周りを調べ始めた。」

光一「リニス、どうかしたか？」

リニス「実は、フェイトを探しているんです」

光一「居ないのか？」

リニス「はい、家中搜したんですけど」

光一「後、この部屋だけって事か？」

リニス「そうなります」

光一「とリニスがフェイトの事を話していると。」

なのは「光くん…フェイトってだれ？」

そこには、なのはと言う悪魔が立っていた。

光一「落ち着けなのは、フェイトは只の協力者だ」

なのは「協力者？」

光一「ああ、フェイトは魔導師で昨日ジュエルシードを集める為に協力する事にしたんだ」

なのは「本当に？」

光一「本当だ」

なのは「そいだよね、光くんが浮気する訳無いもんね」

なのはと言う悪魔は去っていった。

光一（最近なのはが怖い）

リニス（このまま行けば、ヤンデレもありますね）

光一「そうだ、フェイトを捜さない！」

光一は話を元に戻した。

リニス「そうでしたね」

光一「この家中搜したんだよね？」

リニス「はい」

光一「なら外に出たか？」

リニス「かもしれません」

光一「なら、外捜してみるか」

光一は、外を搜索する為に着替え様とベッドから出ようとした時。

？「うん…動いちゃダメ」

光一のベッドから女の子の声がした。

光一「なっ!？」

光一は自分の布団を退けてみた。

そこには、光一のベッドで眠るフェイトが居た。

なのは「……光くん……その子……ダレ？」

光一「ひっ!？」

そこには、少し前に去っていった悪魔が再び立っていた。

光一「待てなのは、俺は何も知らない!」

なのは「じゃあ、何で一緒に寝てるの?」

光一「そ、そうだ、フェイト起きろ起きてなのはに説明してくれ」

光一はフェイトを揺すって起こした。

フェイト「…どうしたの光一?」

フェイトは眠そうに答えた。

光一「なあ、フェイト何で一緒にベッドで寝てるんだ?」

フェイト「昨日、早苗さんが子供同士だし一緒に寝なさいって」

光一（母さん…余計な事を）

光一「ほら、なのは別に変な事はしてないだろ」

なのは「本当に？」

光一「本当だ」

光一（このやり取りさつきもしたよな？）

フェイト「光一、この子誰？」

フェイトは光一になのはの事を聞いた。

光一「昨日言ったら、もう一人居るって、なのは自己紹介しろ」

なのは「うん、初めまして高町　なのはです光くんの幼なじみで生涯のパートナーです」

光一「お前何言ってるの！？」

なのはは何故か勝ち誇った顔になる。

フェイトは逆に悔しそうな顔になる。

フェイト「む、初めましてフェイト　テストロツサです、光一の家置いて貰ってます光一が望めばあんな事やこんな事もします」

光一「お前も何言ってるの！？」

なのは「なっ!?!」

今度はフェイトが勝ち誇った顔になる。

なのは「うー、私と光くんは親公認だから、フェイトちゃんが入る隙何て無いよ!」

光一「待て、俺親公認なんて初めて聞いたぞ!?!」

なのは「それはそうだよ、だって光くんにはまだ秘密って事になってたんだから!」

光一「俺の知らない所でそんな事になってたの!?!」

リニス（マスター 憐れですね）

フェイト「でも、それ本人が望んで無いんだよね? なら意味無いよ」

2人は睨み合う。

光一「おい、2人共落ち着け!」

な・フ「光くん（光一）は黙ってて!」

光一「はい」

光一は2人を止めようとしたが、無理だった。

リニス「マスター弱いですね」

光一「いや、あの2人怖くて」

光一とリニスが話していると、なのはとフェイトが。

な・フ「光くん（光一）はどっちが良いの？」

光一「え〜と、何が？」

なのは「光くんは私を選ぶよね！」

フェイト「光一私を選んで！」

光一「だから何が!？」

2人が光一に詰め寄り聞いて来る

なのは「ジュエルシードを集めるパートナー」

光一「別にパートナーなんて決めなくても良いんじゃない？」

フェイト「良いから選んで！」

駄目らしい。

光一がどうしたら良いか考えていると、時計が目に入った。

光一「あつ、もうこんな時間じゃないか遅刻してしまう（棒読み）」

光一はこの場から逃げようと、立ち上った瞬間。

なのは「レイジングハート！」

フェイト「バルディッシュ！」

2人が自分のデバイスの名前を言った瞬間、光一にバインドが何重にも巻き付いた。

光一「なっ！？」

光一はそのまま倒れた。

なのは「逃がさないよ…光くん」

フェイト「何で逃げようとするの…光一」

光一（怖い！）

なのはとフェイトの目は単色になり光一を睨んでいた。

なのは「光くんとは一度分かり合う必要が有るみたいだね」

フェイト「大丈夫だよ…痛くは無いから」

2人はじわじわ光一の方に来る。

光一「く、来るな、来るな来るな——！！！」

なのは「少しO・H A・N A・S Iしようか」

「暫くお待ち下さい」

《ガチャ!》

ユーノ「光一、ご飯食べないの?」

アルフ「食べないんなら、アタシが貰うよ!」

ユーノとアルフが何時まで経っても来ない光一達を呼びに来た。

な・フ「ナニ?」

ユ・ア「ごめんなさい!」

回想終わり

光一「もう、宜しいでしょうか?」

な・フ「ダメ!」

光一「はい…」

あれから30分以上説教を受けています。

なのは「光くんは、なんで私だけ見ないの?」

最早、説教の内容が訳の分からない物になっている。

この説教は、学校に行くギリギリまで行われ、光一は朝ご飯を食い損ねたのは言うまでもない。

光一が急いで学校に行く支度をしている間、なのはとフェイトは。

なのは「フェイトちゃん、光くんは私と付き合っの」

フェイト「そんな事無いよ、私と付き合っんだよ」

な・フ「……………」

2人は睨み合う。

なのは「負けないからね」

フェイト「私こそ」

2人はライバル宣言をした。

リニス（これからどうなるんでしょうね…あの2人は）

ライバル（後書き）

次回「猫」お楽しみに

次回は本編と番外編投稿します。

猫（前書き）

最新話投稿します！

ついでに番外編「誓い」読んで頂けたら幸いです。

猫

【光一 side】

なのはとフェイトの出会い（修羅場）から数日が経った休日、俺はフェイトに街の案内をする為に家を出た。

ついでになのはは、すずかの家でお茶会に誘われたのでそっちに行った。

初めは、フェイトの案内について行くと言って聞かなかったが、俺が「今度遊びに連れてってやる」と言うのと直ぐに言う事聞いてくれた、俺はそんなに喜ぶ事では無いと思うのだが、リニスが「もう少し女性の気持ちを理解した方が良い」と説教された、フェイトも不機嫌だし。

光一「俺何かしたか？」

そして今、俺はフェイトと街に来ている。

【光一 side】終了

光一「フェイトどうだ、楽しいか？」

光一はフェイトに街の案内が楽しいか聞く。

フェイト「うん、人が多くて疲れるけど色々な物が有って楽しいかな」

光一「そうか、それは良かった」

アルフ「ねえ光一…あたしお腹が空いたよ！」

光一とフェイトが話していると、アルフ（人型）が空腹を訴えてきた、因みにアルフの尻尾と耳は隠してある。

光一「そうだな…そろそろ良い時間だし、飯食うか」

フェイト「うん」

アルフ「あたし肉が良い！」

光一「肉って…昼からか？」

昼から肉は重たい、だから光一は出来る事なら避けたい。

フェイト「アルフダメだよ！無茶言ったら」

フェイトはアルフを叱る。

アルフ「…分かった」

光一は、3人で手頃に食べられるお店を探し○クド○ルドを見つけた。

光一「○クド○ルドで良いか？」

フェイト「○クド○ルド？」

光一「ああ、ファーストフードのお店だ、ハンバーガーが美味しくて手頃に食べられるのが売りだな」

光一が軽い説明をする。

フェイト「うん、光一が言うならそこで良いよ」

アルフ「あたしもそこで良いよ」

2人の了解を得て、光一達は○クド○ルドで食事をして、外に出た。

アルフ「なかなか旨かったね」

フェイト「そうだね」

光一「なら、良かった」

光一は2人が満足してくれた事に、安心した。

光一「この後何処に行くかな？」

光一が次に何処を案内するか、迷っていると。

3人「!?!」

ジュエルシードの反応をキャッチした。

光一「どうやら、発動したみたいだな」

フェイト「封印に行く」

2人は人目に付かない場所に行き、デバイスを起動させ、バリアジヤケットを着て、ジューエルシードの発動場所に行った。

光一「おいおい…此処って」

光一はこの場所を知っていた。

アルフ「知ってる場所なのかい？」

光一「ああ、俺の友達の私有地だ」

アルフ「私有地って、此処森だよ！」

光一「資産家なんだよ」

此処は光一の友達事、月村　すすかの実家で、その庭（森とも言っ）だった。

フェイト「……………」

フェイトは光一がすすかの事を言ってからずっと黙ったまま光一を睨んでいた。

光一「フェイト…怖いんだが」

フェイト「ねえ光一、その友達って女の子？」

光一「え〜と、何で？」

フェイト「良いから答えて!!」

光一「女の子です!」

フェイトの剣幕に光一は素直に答えた。

フェイト「ふうん、そうなんだ…光一女の子の友達が多いんだね」

フェイトは光一をジト目で見てくる。

光一「いや…その…男の子の友達も居るよ」

フェイト「そんな事聞いて無い!」

何故かフェイトに説教を受ける光一、本人は何故説教されているのか分かって無い。

説教を少し受けた後直ぐ。

なのは「光くん!」

なのはが光一の方へ、飛んで来た。

光一「なのは、良く来てくれた」

光一は、なのはが来てくれた事に喜んだ。

なのは「光くん…何で空中で正座してるの?」

今、光一はフェイトに説教を受けながら空中で正座をしていた。

光一「いや、急にフェイトが説教を始めて」

フェイト「光一が悪いんだよ!」

フェイトは光一が悪いと言い張る。

光一「別に、女の子の友達が居ても良いだろ?」

なのは「光くん…動いちゃダメだよ」

光一「なのは?」

なのは「正座止めたらダメだよ」

光一「え〜と、なのは?」

なのは「光くん、少しOHANASIしよいか」

この後、リニスに止めて貰うまで説教は続いた。

リニス「もう、3人共優先順位を間違えないで下さい!」

な・フ「…はい」

光一「何で俺まで…」

リニス「特にマスター、後でお話が有りますから」

光一「俺、何かした？」

リニス「お説教です」

光一「何で！？」

リニス「では、ジュエルシードの封印をしましょう」

光一「スルー！？」

ユーノ「諦めなよ」

光一「…理不尽だろ」

光一は落ち込んでいた。

落ち込んでいた光一は、リニスに言われ封印のフォローに入った。

光一「しかし、デカいな」

ユーノ「デカいね」

2人の目の前には、巨大な猫が居た。

光一「これも、ジュエルシードの力か？」

ユーノ「うん、多分この猫の大きくなりたいて言う願いを正しく叶えたんじゃないかな？」

光一「なる程、なら危険性は無いんだな？」

ユーノ「大丈夫みたいだね」

ユーノが危険性の無い事を確認する。

光一「2人共、危険は無いみたいだから、さっさと封印して終わらせるか」

光一がなのはとフェイトに言う。

な・フ「うん」

その後、ジュエルシードの封印はスムーズに終わった。

えっ、トラブルが無かったかって？有ってたまるか最近トラブルだらけなんだぞ！

しかし、問題はジュエルシードを封印して帰る時に起きた。

アリサ「光一…この子誰？」

アリサがジト目で光一を見る。

すずか「何で、仲良さそうに歩いてるの？」

すずかも、光一を睨む。

何故こうなったかと言うと。

ジュエルシード封印↓此処がすずかの家と言つ事を忘れて森から出て来る↓アリサとすずかに見つかる。

光一（マズい、此処すずかの家って事忘れてた）

光一「え〜と、親戚の子だよ」

光一は、アリサ達に言い訳する。

アリサ「本当に？」

すずか「信じて良いの？」

2人の疑いの目が光一に突き刺さる。

光一『なのは、フォローしてくれ！』

光一はなのはにフォローを頼む。

なのは『光くん…タダでは無理だよ』

なのはは光一に見返りを求める。

光一『くっ！…何が目当てだ』

なのは『今日、光ちゃんと寝たい』

なのはと一緒に寝る事を要求する。

光一『…分かった要求を呑む』

光一は諦めた。

なのは「光くんの言ってる事は本当だよ」

なのはが光一のフォローをする。

流石なのはまでウソを付かないと分かったのか、アリサとすずかは信じた。

その後、光一達は逃げるように帰ってきた。

光一「ふう、疲れた」

光一は自分のベッドに座る。

なのは「にやはは、そうだね私も疲れちゃった」

光一「なのは…何故俺の服を脱がそうとする？」

なのはは光一の服に手を伸ばしていた。

なのは「だって一緒に寝てくれるんでしょ？」

光一「一緒に寝るとは言ったが服を脱がせろとは言っていない！」

光一がなのはに言う。

なのは「じゃあ、光くんが脱がないんなら私が脱ぐ！」

光一「脱ぐな！」

光一はなのはを叱った。

光一「たく…オイ、フェイト何脱ごうとしてる」

光一はフェイトを見るとフェイトは自分の上着を脱ごうとしていた。

フェイト「光一が脱ぐなら、私も…」

なのは「フェイトちゃん！光くんが見て良い裸はなのはだけだよ！」

フェイト「なのはには関係無い、これは光一と私の問題！」

なのは「私と光くんの問題なの！」

フェイト「私！」

なのは「私！」

2人はお互いに睨み合う。

な・フ「光くん（光一はどっちの裸が見たいの！？）」

2人は光一に詰め寄って聞く。

光一「…頭痛い」

光一は、なのはとフェイトのやり取りに頭を痛めた。

リニス「マスター居ますか？」

リニスが入って来る。

光一「リニス良いと所に」

光一は、タイミング良く入って来たリニスに助けを求めたが。

リニス「さあ、お説教を始めましょうか」

光一「お、お説教？」

リニス「はい、さっき言いましたよ」

リニスは光一に、さっきお説教する事を伝えていた。

光一「…マジ？」

リニス「はい」

光一「理不尽だ——！」

光一はリニスから5時間も説教を受け、寝る時はなのはとフェイトと一緒に寝かされた。

勿論、なのはに襲われたのは言うまでも無い、ついでに言うとフェイトにも襲われた。

猫（後書き）

次回「デート？」お楽しみに

デート？（前書き）

今回は、なのはとデートの話です。

けーくん様のアドバイスに有った台詞の前に名前を付けないを今回試してみました、今回初めての試みなので読みにくいと思う人が出て来ると思いますが、どうか温かい目で見守って下さい。

ではどうぞ！

デート？

【なのはside】

私は、何時も1人だった。

家族が居て家族の仲も良く、端から見れば文句の付けようが無い幸せな家族。

でも、私は…1人だった。

家族の中で1人だけ浮いていた。

まるで、完成した絵に後からそんなに必要無い色を付け足す様な。

そんな風に、私は何時も1人だった。

そんな私にも、友達が出来た。

「神崎 光一」私の初めての友達。

私は必死になった、この寂しい気持ちを満たす様に、初めはこの気持ちを満たす為の代用品程度にしか考えて無かった、何時かは私から離れて行く、そう思ってた。

でも、何時まで経っても彼は私から離れて行かなかった、私も次第に彼を自分を満たす代用品と考えは無くなっていった。

次第に、満たされて行き寂しい想いをしなくなっていたが、事件が起きた。

お父さんが仕事で怪我をして入院したのだ、その性でお母さんとお姉ちゃんは忙しくなり話すらする時間も無くなり、お兄ちゃんはその日以来怖くなり近づく事すら出来なくなった。

そして、私は忘れかけていた孤独感が蘇った。

その孤独感を急いで消す為、彼と遊ぼうとしたが、ある考えが頭をよぎった。

もし、今彼に嫌われたらどうしよう、孤独感を消す為に無理を言って離れて行ったらどうしよう。

私はそれが怖くて、彼を誘う事が出来なかった、だから私は嫌われる位なら嫌われない様に良い子に1人で遊ぼうと考えた、1人で遊べば彼に無理を言わないし、嫌われないから。

暫く、私は1人で遊んでいたが、やっぱり駄目だった、1人は寂しく心細かった。

私は、次第に悲しくなり勝手に涙が零れ始めた、誰かに構って欲しい誰かに私を見て欲しい彼に逢いたい、そう考えたい時。

「なのはちゃん？」

今、1番逢いたい人が居た。

彼は、最近私と遊ばなかった為会いに来てくれたらしい。

私は凄く嬉しかった、でも、そんな彼に嫌われたく無かった、だから、私は彼を今の私から遠ざけけ様とした、しかし彼は、私を抱き締めてた。

私は、何故彼が抱き締めているのか分からずにいると。

「なあ、なのは俺頼り無いか？」

彼は、自分は頼り無いか聞いてきたが、そんな事無いと私は否定して、嫌われる覚悟で自分の気持ちを打ち明けた。

しかし、彼からの答えは予想外の答えだった。

「バカ…なのは置いて行くわけ無いだろ、俺がお前の全てを受け止めてやる」

私は勘違いしていた、彼を嘗めていた、彼は私を裏切らない彼は私を大事にしてくれる、私は彼を大切な友達と思っている心のどこかで、彼を信じていなかったのだと分かった、だから、この時私は自分の愚かさに腹が立った彼を信じきれなかった自分が怒りを覚えた。

私は、彼の言葉に今まで溜め込んでいた全てが溢れだし、涙が続く限り泣いた。

この日、私の全てが変わった、見るもの感じるもの全ての世界観が変わったのだ、それも全て彼のお陰、だから私は彼をこれからどんな事が有ろうと信じて、彼を愛そうと思った。

【なのはside】終了

「ハア、デート？」

「そうだよ、デートしょ！」

いきなりなのはが、訳の分からない事を言ってきた。

「何でデートしなきゃならん」

光一は、なのはが何故いきなりデートに誘うのか分からなかった。

「だって、約束したから」

「約束？」

光一は何時約束したのか分からずにいると。

「フェイトちゃんの街案内の日に遊びに連れて行ってくれるって言ったよ！」

「あっ！」

光一は思い出した、確かに言っていた、その日なのはが自分もフェイトの案内に付いて行くと聞かなかったので、近い内に遊びに連れて行ってやると。

「思い出した？」

「思い出した」

「なら、デート行こー!」

なのはは、光一にデートに連れて行く様促す。

「お前な…遊びに連れて行くとは言ったが、デートに行くとは言うて無いぞ」

「私にとってはデートなの!」

なのはは、そこだけは譲れない様だった。

「ハア…分かったよ、準備するから待ってる」

光一は、遂に折れて外に出る為の準備を始めた。

「やったー!」

なのはは相当嬉しかったのか、飛び跳ねて喜んだ。

光一となのはは市街地から街に遊び（デート）↑なのはは的に此処重要に来た。

「しかし、なのはと2人だけで遊ぶのも久しぶりだな」

光一は最近遊ぶ時は、アリサとすずかが一緒に居る為、最近は2人

きりで遊んだ記憶が無いのだ。

「そつだよ、最近は余りなのは構ってくれないし…ハッ！分かった、放置プレイなんだね！」

（相変わらず、色々と残念な子だな）

光一は、今のなのはに憐れみを覚えた。

「私は光くん相手なら、どんなプレイでもドンと来いだよ、寧ろウエルカムだよ！」

今のなのはは、目を充血させ息は荒くまさに、獲物を狙う肉食動物の様だった。

暫くして、なのはを落ち着かせ光一となのはは、色々見て廻った。

「わー、これ可愛いかも？」

なのはは、今新作の服を見ていた、白のワンピースだ。

「白か…制服やバリアジャケットと言いなのはには白が似合うよな」

光一はなのはに白が似合う事を言つと。

「／／／本当に？／／／／」

なのはは照れながら聞いてきた。

「ああ、似合うよ」

「／／／有…難う／／／」

なのはは顔を真っ赤にさせお礼を言った。

「このワンピース買おうかな？」

なのははワンピースを買おうか考えていると。

「まず、試着してみたらどうだ？」

光一は提案する。

「うーん、そうだね！」

なのはは光一に言われた通りに試着してみる事にした。

試着中…。

《ガラ》

試着が終わったのかカーテンを開けてなのはが出て来た。

「……………」

光一は言葉が出なかった、別に似合わないからでは無く、似合い過ぎて言葉が見つからないのだ。

「…どう…かな？」

なのはな光一が感想を言わなかった為、不安になり聞いた。

「／／／／えっ！？か、可愛いぞ！／／／／／」

光一はなのはに感想を聞かれた為答えた。

「／／／／可愛い…／／／／／」

なのはは光一に可愛いと言われた為、照れていた。

この時、店員さんは微笑ましい物を見る目をしていた。

結局、なのははこのワンピースを買う事にしたのだが。

「俺が払うよ」

光一がワンピースを買うと言った。

「そんな、悪いよ！」

なのはは自分の物なのに、奢って貰う事に気が引けていた。

「こう言った時は、男が出す物なんだよ」

「でも…」

「なら、このワンピースは俺からのプレゼントだ、それなら良いだろ？」

光一はなのはにワンピースをプレゼントすると言つと。

「…分かった、有難う光くん」

なのはは折れた。

ワンピースを買った後、お昼を食べる為近くの喫茶店に入った、料理を注文し出て来た料理を食べている時。

「光くんの料理美味しそうだね？」

なのはは、光一が食べている料理が美味しそうだったのか、ふと、口にした。

「少し食べるか？」

「良いの？」

「ああ、ほら、口開ける」

「／／／えっ！？／／／／」

「あーんだよ、あーん」

光一はなのはに自分が食べさせてやろうとしていた。

「／／／あ、あーん／／／／」

なのはは、照れながら光一に食べさせて貰った。

光一も自分が何をやったのか理解し、照れ始めた。

食事を終わらせ、その後も買い物などをして、今公園に来ていた。

「結構買ったな」

光一は荷物を見て言う。

「ねえ…光くん」

「何だ？」

「此処だよね、なのはが泣いてたの」

なのはは周りを見渡して言う。

光一は5歳の時の事を思い出して。

「ああ、此処だな」

光一は答えた。

「あの時の私は、色々溜め込んで何時も一人で落ち込んでた」

「そうだったな」

「光くん、覚えてる？…光くんが、私に言ってくれた言葉」

「覚えてるぞ、全て受け止めてやるだろ？」

光一はなのはの問いに答える。

「うん…私あの言葉のお陰で今の私が有るの」

「おいおい、大袈裟だろ」

「大袈裟じゃ無いよ、あの言葉が無かったら今でも私は1人で辛いこと溜め込んでた」

なのはは、真っ直ぐ光一を見据えて言う。

「だから………ありがとう」

なのはは自分の感謝の言葉を光一に伝える。

「…なのは」

光一は困惑する、今までこんなに真剣なのはを見たことが無い為。

そしてなのはは、自分の想いを言葉にする。

「／／／…好きです…光くんが好きです／／／／」

なのはの精一杯の想い。

光一は。

「悪い」

「っ!?!?.....そう...だよ、いきなり告白なんて...したって困る...よね、それになのは...じゃ...嫌...だよ」

なのは泣きそうになるが、堪えていた。

「違う!...そんな事じゃ無いんだ」

光一は否定する。

「ふえ...違う?」

「ああ、別になのは事が嫌いな訳じゃ無い、むしろ好きだと思う、でも」

「でも?」

「分からないんだ、この気持ちが本当に異性に対する好きなのか、もしかしたら、友達としての好きかもしれない、だから、今は答えを出せない」

光一は、なのはに自分の想いを伝えた。

「じゃあ、なのはの事嫌いじゃ無いの?」

「当たり前だ!」

「なら、好きでいて良いの?」

「もしかしたら、友達としての好きかめしれないぞ、それでも良いのか？」

光一はなのはに聞く。

「良いよ、なら光くんが私の事本気で好きって言って貰える様頑張るから！」

「…なのは」

光一は驚いた、なのはが此处まで強いとは思わなかったからだ。

「だから…良いよね？」

「…えっ!？」

光一は、反応する事が出来なかった、なのはは光一に詰め寄り、唇にキスをしたのだ。

「／／／ファーストキスだよ／／／」

「……………」

光一が呆けていると。

「放してーーーーー!!!!」

「「?!」」

いきなり叫び声が聞こえ、2人が叫び声がした方を向くと、そこにはリニスとアルフそして、泣き叫ぶフェイトが居た。

「ちょ、ちよつとフェイト落ち着いて！」

「そうですよ、今出るのはマズいです！」

「だってだって、今なのはにキスに光一が！」

余りに興奮し過ぎて最早、理解不能な事を言い始めたフェイト。

「アイツら、見てたのか」

「あゝあ、良い所だったのにな」

なのはは、少し残念そうに言う。

「なあ、なのは、今さっきのキスって「本気だよ！」」

光一が最後まで言う前に、なのはが答える。

「光くん、覚悟しててね」

なのはの言葉には、強い意志が感じられた。

その後、フェイトを全員で落ち着かせ、帰宅した。

余談だが、帰宅中高町家のそばを通った時、恭兄に会いデートの事がバレて、狂戦士にジョブチェンジし体力の続く限り追い回された。

デート？（後書き）

次回「温泉に行こう！」お楽しみに！

温泉に行こう！（前書き）

最新話投稿！

前回がなのはtimeなら今回はフエイトtimeです。

後、後書きでアンケートを実施します。

では、どうぞ！

温泉に行こう！

「……………どうも、神崎 光一です」

「えーと、ユーノ スクライアです」

2人は何故か自己紹介を始めた

「ねえ、光一…この入り読者さんが困惑すると思うよ」

「ユーノ、メタな発言は慎む！」

「ごめん、分かった」

ユーノが光一に誤る。

「実を言つと、今俺は困ってます……なので、ユーノに相談しよう
と」

「なる程、でも光一が困るって余程の事？」

光一は普段しっかりしている為、相談など余り想像が付かなかった。

「おいおい、俺だって悩んだりするって」

「そうだよな、うん、分かった、僕で良ければ相談に乗るよ」

ユーノは、相談に乗る事に承諾してくれた。

「ありがとう…実はな…」

「うん」

「最近フェイトが、マジで無視するんだ」

光一は悩みを打ち明けた。

「はっ？…えーと、どう言う事？」

「フェイトが、あからさまに俺の事避けるし、話かけても無視してくるんだ」

光一は、鬱気味に言う。

「えーと、何で？」

「全然分らないんだ」

「フェイトが光一を無視するなんて、何か有ったの？」

フェイトが神崎家でお世話になってから光一との関係は良好、なので、フェイトが光一を無視するなんてまず有り得なかった。

「実は、なのはとく（前話の説明中）くって事が有ったが、フェイトが何故無視するのか分からないんだ」

「……………本当に分からないの？」

ユーノは有り得ない物を見る目をする。

「ユーノは分かるのか？」

「…うん」

ユーノは逆に何故分からないのか聞いたかった。

「なら、なら教えてくれ！」

光一はユーノに助けを求めた。

「良いけど…ねえ、リニス達に1度相談した？」

ユーノは光一にリニス達に相談したか聞く。

「したけど、「自分で考えなさい！」って突き放された」

「なら僕も、言わない」

ユーノも言わない事にした。

「何故!？」

光一はどうして教えてくれないのか分からなかった。

「自分で考えなよ、自分の事なんだから」

ユーノは冷たく突き放す。

「どうして………」

光一が落ち込んでいると。

「光ちゃん、ちよつと良い？」

下の階から母親が光一を呼んだ。

光一は仕方なく下に降り、母親の所に向かった。

「何、母さん？」

光一が何の用事が聞くと。

「実は、お母さんとお父さん明日の温泉行けなくなったの」

明日から、高町家、神崎家、月村家、アリサの大人数で1泊2日の温泉旅行に行くのだが、神崎家の保護者サイドが行けなくなったのだ。

「何で？」

光一は理由を聞くと。

「じ・つ・は……この前福引きで当てた旅行券が明日明後日までの」
1ヶ月前、早苗は商店街の福引きで旅行券を当てていたのだが、なかなか都合が付かず行けなかった、その為今回の休みは都合が良かった。

「士郎さん達には?」

「もう、伝えてあるは」

早苗の仕事は早くもう、伝えてあるらしい。

「分かった、なら明日は俺とフェイト、リニスにアルフとユーノで行くよ」

明日の旅行は神崎家組は5人で行く事を確認すると、早苗は。

「その事なんだけど、フェイトちゃんとアルフちゃんは、こっちに付いて来る事になったの」

「どうして?」

「何でも、今光ちゃんと一緒に居たく無いって言ったの」

「……………」

光一はあからさまに落ち込む。

《ガチャ》

フェイトがドアを開けて入って来た。

「あら、フェイトちゃん良いところに来たわね」

「何ですか?」

フェイトは早苗に呼ばれて近づく。

「フェイトちゃん、光ちゃんと喧嘩したの？」

早苗は何故フェイトが光一を避けるのか知らなかった為聞いてみた。

「……………光一が悪い」

その一言で早苗は全てを察したのか。

「そうみたいね、光ちゃんが悪いのね」

「ちょっと待ってくれ、俺の何が悪いんだ？」

光一は、やっぱり何が悪いのか分からず聞く。

「とにかく、光一が悪いの！」

「…訳が分からん」

結局、フェイトと和解出来ずに次の日を迎えた。

「光くん…光くん…」

「揺らすな…なのは、俺は眠たいんだよ」

光一は、一晚中何が悪かったのか考えていた為、眠って無かった。

「あんだ、寝て無かったの？」

アリサが光一に聞く。

「ああ、考え事」

光一は素っ気なく答える。

「ブー、詰まんない！」

なのは光一が眠っている事に不満が有った。

「なのはちゃん、落ち着いて」

それを、すずかが宥める。

「で、何悩んでるの？」

すずかが相談に乗ろうとするが。

光一は、昨日の事が有り、この問題は自分で考えて解決しないといけない問題だと分かった為。

「いや、良いよ、もう解決しそうだから」

光一は適当にはぐらかした。

暫く車に揺られ、宿泊する旅館に着いた。

チェックインした後、部屋割り通りに分かれて荷物を置いてくつろ

いでいた。

ついでに言うと、光一達の部屋は光一なのはアリサすずか＋ユーノ（フェレット）＋リニス（猫）とで1つの部屋だ。

「あゝ、眠い」

光一も限界が近かった。

光一は、布団を自分で敷いて、寝転んだ。

「ちょっと、あんたもう寝る気!？」

アリサは光一に聞く。

「俺は…眠いの…だから…寝る」

光一の言葉も途切れ途切れになっており限界が近いのが分かる。

「……………」

なのはは光一を見て何を思ったのか。

「ねえ、光くん？」

「…何だ？」

「寝るの？」

「今言つたら、俺は眠いって」

「一緒にお風呂行きたかったな」

「俺抜きで行けば良い」

「今、光くん…無防備だね」

なのはは、光一の近くまで行き。

「今なら、貞操…襲える（ボソボソ）」

なのはは呟く様に言う。

「さあ！お風呂に行こうか！お風呂楽しみだなー！」

光一は、布団から光速で起き上がり、なのはから離れた。

「……………チツ！」

なのはは、聞こえない様に舌打ちした。

「ねえ、すずか最近なのはの事が分からなくなるの」

「あはは…私もかな」

2人は、最近なのはが遠く感じるのだった。

（マスターも大変ですね）

（…光一…大変だね）

リニスとユーノは心の中で、光一を憐れんだ。

光一達は温泉に入る為、脱衣場の入り口まで来たのだが。

「オイ…離せ！」

「嫌！」

なのはが、光一と一緒に温泉に入ろうとして、女風呂側に引っ張り込もうとしていた。

「アリサ、すずか、なのはをどうにかしてくれ！」

光一は2人に助けを求めるが。

「良いじゃない、一緒に入っただって」

「私も別に良いよ」

まさかの、裏切り。

「オイ、俺は男だぞ！」

光一は自分の性別を言うが。

「光くん、アレ！」

なのはが指を指した場所には「10歳まで女風呂に入る事許可」みたいな事が書いてあった。

「光くん、10歳以下だから一緒に入れるよ」

なのはがドヤ顔で言う。

「お前らには、羞恥心が無いのか!？」

光一が、自分と入る事に恥ずかしさが無いのか聞く。

「////////光くん、だったら良いかな////////」

1ストライク!

「////////べ、別に、光一なら文句無いわよ////////」

2ストライク!

「////////光くんになら、別に私の裸見られても……////////」

ストライク!アウト!!

3人は顔を真っ赤にして言う、後アリサ今のお前には、もうツンデレのツの文字もないぞ!

「と、兎に角、俺は男風呂に行く!」

光一は、居づらくなり、ユーノを掴んで男風呂の方に逃げ込んだ。

「「「あっ!」「」」

3人は、反応が遅れ光一を逃がしてしまった。

光一とユ一ノは脱衣場に入ると、そこには士郎と恭也が居た。

「光一くんも温泉かい？」

「ええ、まあ」

「寝てたんじゃ無いのか？」

「なのはが、起きるとうるさくて」

光一は、なのはが寝させてくれなかった事を伝える。

「…そうか」

その後、光一達は温泉に入り、のんびりしていると。

「なのははどうだい？」

士郎が光一になのはとの関係を聞いてくる。

「何の事です？」

光一ははぐらかす。

「ははは、別に隠さなくても良いよ、私は反対はしないから」

「落ち着きなさい」

士郎は、興奮した恭也を殴り気絶させた。

（哀れだな、恭兄）

（うわゝ、痛そう）

恭也が気絶して、暫く温泉を堪能し、浴衣に着替えて出ると。

（！？…この魔力、フェイトか？）

光一は、フェイトの魔力を感じて、浴衣から私服に着替え、フェイトの魔力がする方に行くと、そこには岩の上に座るフェイトが居た。

「フェイト？」

「！？…どうして、光一が？」

【フェイトside】

光一達が温泉に行く為家を出た後、私も早苗さん達と旅行に出た。

「……………光^{ボソ}一」

「光ちゃんがどうかした？」

「！？…どうして？」

「フエイトちゃんが今自分で言ってたわよ」

「／／／／っ！／／／／」

どうやら、自分で言ってたらしい。

ちよつと前までの私では、有り得無かった筈なのに、どうしたんだろっ私。

そんな事をフエイトが考えていると。

「光ちゃんの事が気になる？」

早苗がフエイトに質問する。

「…分からない」

「どうして？」

「少し前の私だったら、こんな事有り得なかったのに、光一と出会ってからは、光一の事ばかりが気になる」

フエイトは早苗に自分の気持ちを言う。

「ふふ、フエイトちゃんも女の子ね」

「私は女の子だよ？」

「そう言う事じゃ無いのよ、でもまさかなのはちゃんに続いてフェ

イトちゃんまで光ちゃんの事好きになるなんて」

「えっ!?!」

私は早苗さんが何を言ってるのか分からなかった、私が光一を好きになる?...私が光一を.....

「..... / / / / /」

フェイトは、自覚が無かったのか顔を赤くさせた。

「自覚無かったのね」

私は、この気持ちの正体に気づき、心が暖かくなった。

(私、光一の事好きだったんだ...でも)

私は、ジュエルシードを集めてお母さんに届ける為に此処に居る、光一はユーノの為にジュエルシードを集めてるだから今は一緒に居ても最後には敵になる。

「やっぱり...違う」

「何が違いの?」

「私と光一達は敵で分かり合えない、だから私は光一の事好きじゃ無い」

フェイトは光一への想いを否定する。

「……………そっか」

早苗は理解してしまった、今のフェイトの不器用な気持ちを辛い立場を、だから早苗は何も言わなかった。

（フェイト…）

アルフはそんなご主人様を見守る事しか出来なかった。

その後、私達は旅行に着いて部屋に荷物を置き休んでいたけど、私は今1人になりたくて外に出た、暫く歩くと丁度良い岩を見つけ座った。

（光一…楽しんでるかな？）

私は、光一が今何をしているのか気になった。

（あのなのはって子と一緒に楽しんでいるのかな？）

私は、一瞬あのなのはって子の事を思い出した、光一と一緒にジュエルシードを集めてる女の子、光一の幼なじみで光一の事が好きで、私にとっては、只の初心者魔導師に過ぎない少女。

（光一がなのはって子と居ると、胸が締め付けられて苦しい、何で？）

この痛みは何なのか、私は考えた、もしかして…嫉妬？

（ち、違う！私は別に光一の事何て好きでも何でも無い！）

フェイトはこの気持ちを認め無かった。

「……………ハア」

私が溜め息を付くと、後ろから。

「フェイト？」

後ろには光一が居た。

【フェイトside】終了

「……………」

2人に気まずい空気が流れる

「えーと、フェイト？」

「なっ何!？」

光一が先に動いた。

「どうして此处に？母さん達と旅行に行ったんじゃ？」

光一は何故旅行に行った筈のフェイトが、此处に居るのか聞いた。

「えっ!？だって、私達が泊まってる旅館近くだよ!」

「はっ!？近く？」

光一はフェイトの指を指す方向を見ると、確かに旅館が有った、光一達が泊まってる旅館との距離僅か500メートルだった。

（旅館近！！）

「もしかして、光一が泊まってる場所ってアソコ？」

フェイトが光一達が泊まっているホテルを指さす。

「ああ」

「……………近いね？」

「ああ」

「……………」

再び沈黙が訪れる。

「……………ごめん、フェイト」

光一はフェイトに謝る。

「えっ！？どうして？」

フェイトには、何故光一が謝るのか分からなかった。

「ほら、フェイト俺の事怒ってたろ？…だから」

「あれは、違うの！あれは、私が悪いの」

「フェイトが悪いつて、どう言う事だ？」

光一が理由を聞く。

「ごめんなさい…理由は言えない」

フェイト自身都合の良いことを言っているのは分かる、だから何を言われる覚悟をしていた。

「……………分かった、フェイトが自分から教えてくれるまで待つよ」

「どうして!？」

「何が？」

「怒らないの？」

「何で？」

「だって、私都合の良いこと言ってるんだよ!なのに…」

「言えないんだろ?なのに、無理矢理聞くわけにもいかないし、だから待つよフェイトが話してくれるまで」

「光一…ありがとう」

その後、2人は暫く話して別れて旅館に戻った。

旅館に戻った後、光一はなのはとOHANASIしたのは余談であ

る。

旅館の夜

「どうやら、反応したな」

「うん、行こうか」

光一達は、ジュエルシードが発動したのを確認して、現場に向かった。

「見て、光くん、フェイトちゃんか！」

光一達が現場に着いた時には、もうフェイトがジュエルシードを封印していた。

「もう、終わったみたいだね」

ユーノが封印を確認して言う。

「当たり前さ、フェイトはあたしのご主人様なんだよ、これ位簡単だよ！」

アルフが自慢気に言う。

「ねえ、光一？」

「どうした？」

「一度、あの子と戦って良い？」

フェイトはなのはとの勝負を望んだ。

「フェイト！？ダメです！」

リリスが止める。

「良いんじゃないか？」

「マスター！？」

「なのははどうだ？」

光一はなのはに聞く。

「私は良いよ」

なのはからの承諾も得た。

「マスター、あなたは何を考えているんですか！？」

「そうだよ光一、なのはにはまだ早いよ！」

リリスとユーノは反対の様だった。

「2人共落ち着け、良いじゃないか別に、2人が戦いたいって言うてるんだから、それに、なのはにも良い経験になるしな」

光一はこの勝負が2人にとって良い経験になると思った。

「じゃあ、2人共良いか？」

光一は2人に準備は良いか聞く。

「うん！」

「よし、じゃあ始めるぞ」

2人はそれぞれのデバイスを構える。

「……………始め！」

なのはとフェイトの初対決の幕が切られた。

温泉に行こう！（後書き）

次回「初対決」お楽しみに！

アンケートを実施したいと思います。

内容は

1・オリジナルの敵を出すか出さないか？又出す場合は無印だけなのか、無印から `strikers` まで一貫して出すのか、ぶつちやけ使い捨ての敵か主人公のライバル的なキャラクターか？

2・プレシアとアリシアの生存フラグの `ON・OFF`

です、期間は 2 / 13 ~ 2 / 20 までにします。

アンケートの方宜しくお願いします！

初対決（前書き）

最新話投稿！

今回の話で温泉旅行編終了。

アンケートの中間報告ですが、1番目の質問はライバルは一貫して出す、2番目の質問は生存フラグONです。

まだまだ、アンケートを募集中なので、宜しくお願いします。

初対決

「レイジングハート！」

最初に動いたのは、なのはの方だった。

「デイベインシューター…シュート！」

なのはは、魔法弾をフェイトに射出するがフェイトは簡単に避けてしまう、しかし。

「ッ！追尾弾！？」

なのはの放ったデイベインシューターは追尾性の魔力弾だった。

「でも！」

フェイトは更にスピードを上げデイベインシューターをかわす。

「今度はコッチから行くよ！」

フェイトは攻撃に転じた。

「バルディッシュ！フォトンランサー！」

フェイトは槍状に硬化した魔力弾をなのはに放った。

「速い！プロテクション！」

なのはフェイトのフォトンランサーに回避する事が出来ず、プロテクションで防いだ。

「マスター、大丈夫ですか？」

レイジングハートは自分のマスターの事を心配して聞いた。

「大丈夫だよ…でも、フェイトちゃん強いね」

なのははフェイトとの力の差を感じていた。

【なのはside】

私はフェイトちゃんのフォトンランサーを防いでレイジングハートを構え直した。

（私のディバインシューター簡単に避けられちゃった…何とかして当てないと）

「レイジングハート、又行くけど大丈夫かな？」

私はレイジングハートにまたディバインシューターを放つ事を確認する。

「大丈夫ですマスター」

「じゃあ、何とかして私の魔法当てようか」

私はそう言って、再びフェイトちゃんに向かって飛んだ。

【なのはside】終了

【フェイトside】

「防がれちゃったねバルディッシュ」

私はあの子がフォトンランサーを防ぐとは思って無かった、実際あの子は私のスピードに目が追い付けて無かったのに。

「次は当てましょう」

バルディッシュは私に次に当てようと言ってくれた。

「うん、そうだね」

私は、バルディッシュを構え直し、あの子に向けて飛んだ。

【フェイトside】終了

2人は、再び攻撃する為に飛んだ。

「なのは大丈夫かな？」

ユーノはなのはを心配して光一に聞いた。

「ユーノ、心配しなくてもなのはは大丈夫だよ、死ぬ訳じゃないんだ」

光一はユーノに安心する様に言った。

「ですが、マスターやはりなのはさんにはまだ早かったんじゃないですか？」

リニスは、なのはにはまだフェイトと戦うには経験や実績が圧倒的に足りない事を指摘する。

「…分かってるよ」

光一はそんな事分かっていた。

「なら！」

「それでも、この勝負は必要な事なんだ」

光一はこのどうしても勝負は必要な事だと思った。

「ねえ光一、どうしてこんなにこの勝負にこだわるの？」

ユ一ノには、この勝負余り必要の無い様に感じられた。

「…フェイトだよ」

「えっ？」

「フェイトの為に必要な事なんだ」

「フェイトにかい？」

アルフは自分のご主人様に何故必要なのか聞いた。

「フェイトは悲しい目をしていた、初めて会った時俺には、フェイトがまるで人形のように感じられた、どうして俺と同年の少女がそんな目をしているのか分からない、けど何とかしないとイケない、そう思ったからなのはと戦わせた」

光一は、3人になのはとフェイトが勝負する意味を伝える。

「マスター…そこまで考えて」

リニスはフェイトが何故悲しい目をするのか知っている、だから、リニスには自分のマスターが考えている事に素直に驚いた。

「後、なのはにはどうしても自分より強い相手と戦って欲しかった、自分より強い相手と戦う事で更なる高みに近づくからな」

これが、なのはに戦わせた理由。

「…分かったよ、僕はもう何も言わない」

ユ一ノは光一の意見に賛同した。

「リニスとアルフも良いか？」

光一は2人に文句が無いか聞く。

「あたしは初めから文句は無いよ」

「私も有りません」

2人も賛同してくれた。

光一達がそんな話を話している最中にも、なのはとフェイトの戦いは続いていた。

「ッ！…ディバインシューター！」

「遅い！」

なのはが苦し紛れにディバインシューターを放つが、フェイトが簡単に避けてしまう、なのはのディバインシューターは追尾性自体は有るがまだまだ制御が甘いのだ。

「そこ！」

フェイトは、なのはの懷に移動してバルディッシュの斬撃を当てようとバルディッシュを振るうが。

「プロテクション」

レイジングハート自らプロテクションを張り防ぐ。

「有難う、レイジングハート」

「構いませ」

なのははレイジングハートにお礼を言う。

「…い」

「え？」

「あなたはズルい！」

「どうして、私がズルいの？」

何故自分がズルいのか分からずなのはフェイスに聞いた。

「あなたは、私に無い物を沢山持つてる、なのに……どうして」

フェイスは数日前の光一となのはのキスが頭をよぎった。

「あなたは、楽しい日常や暖かい家族、まだまだ一杯私が無
い物を持つてる、なのに、どうして光一まで欲しがるの!？」

「フェイスちゃん……」

(悲しい目してる、まるで、昔の私みたい)

なのはには、5歳の時の自分と今のフェイスが重なった。

「フェイスちゃん、話聞いて」

しかし、なのははフェイスに話をする時間が無かった、なのはの隙
を作りフェイスがソニックムーヴを使ってなのはの背後に回り込み
フォトンランサーを打った。

「キャー——！」

なのはは、フェイトの魔法をともに食らい落ちてしまった。

「なのは！」

ユーノがなのはの墜落を防ごうと走るが、光一の方が早かった。

「ふう、間に合った」

光一はソニックムーヴを使い、なのはを無事に抱きかかえた。

光一は、フェイトの所まで行き。

「今回は、フェイトの勝ちだな」

「……………うん、疲れたから帰るね」

フェイトは、なのはとの勝負に疲れたて言って帰って行った。

暫くして、なのはが目を覚ました時には、旅館の自室に居た。

「あれ？…どうして部屋に居るの？」

なのはは、さつきまで戦っていたのに、何故今は旅館に居るのか分からなかった。

「気が付いたか？」

「光くん？どうして今旅館に居るの？」

「覚えて無いのか、なのはお前はフェイトに負けて気絶してたんだよ」

光一は、なのはに説明する。

「…私負けたんだ」

なのはは、思い出したのか落ち込んでいた。

「……ねえ、光くん少しお話聞いて貰って良い？」

「良いぞ」

「あのね、フェイトちゃんと戦って見たのフェイトちゃんの目を、フェイトちゃん悲しい目してた、まるで昔の私みたいな…どうしてあんな目してたのかな？」

なのはは、先ほどのフェイトとの勝負で感じた事を光一に伝える。

「分からん…そればかりは本人に聞いてみないと」

「うん」

「なのはには、どうすれば良いか分かってるんだろ？」

光一は、なのはに次はどうすれば良いか聞く。

「私、フェイトちゃんに聞く！…フェイトちゃんとちゃんと向き合ってお話して、どうしてそんなに悲しい目をしているのか聞いてみる！」

なのはなりの答えを見つけた。

（5歳の時、光くんが私を助けてくれた様に、今度は私がフェイトちゃんを助けてあげたい）

なのはは意気込む。

「だから、光くんフェイトちゃんは私に任せて貰って良い？」

「ああ、なのはなりにやってみれば良いさ」

「光くん、有難う」

なのはは光一にお礼を言った。

「さて、そろそろ遅いし寝るか」

今の時間は23時そろそろ寝ないと次の日起きれない。

光一は、寝ようと布団に入っただが。

《クイクイ》

なのはが光一の浴衣の袖を引っ張った。

「なのは？」

「／／／／／光くん…一緒に寝て良い？／／／／／」

なのは顔を赤くさせながら聞く。

「／／／／／…良いぞ／／／／／」

なのはと寝る事自体今更なのだが、数日前の告白の事も有り2人は照れていた。

「／／／／／／／／／／／／／／／」

2人は照れながらも同じ布団で寝る。

クソ、リア充が憎しみで人が殺せたら……おっと脱線する所だった。

次の日

「あんだ、何してるのよ!!」

《ドス!》

「ぐは!痛—!何すんだよ!」

光一は、痛みで目を覚まし暴力を振るった相手を見る…までも無く、アリサだった。

アリサは光一のお腹を踏んづけて怒っていた。

「アリサ、何しやがる!」

光一はアリサに怒鳴るが。

「／／／／あ、あ、あんた、なのはに何したの！？／／／／」

アリサは顔を赤くさせながら聞いてくる。

「何って、一緒に寝ただけだ！」

「／／／／なら、何でなのはそんな格好してるの！？／／／／」

「はっ？そんな格好？」

光一はなのはを見る。

「／／／／なっ！？／／／／」

今のなのはは、浴衣が乱れかなり際どい姿をしていた。

「あんた、なのはと何してたのよ！？」

「違う、俺は何もしてない！」

光一は何もしてないと言い張る。

「本当に何もしてないの？」

さすがが確認する。

「ああ、何もしてない」

光一の頑張りが効いたのか、2人は納得し始めたが、しかし。

「…光くんそこは駄目だよ…」

なのはの一声で全てが終わった。

「
「
光_く
—
「
「

「ひつ！」

光一は恐怖した、そこには目のハイライトが消えたアリサとすずかが居たからだ。

「なに—して—た—の—か—な—？」

2人はゆらゆらと光一に近づいてくる。

「違う、違う、違う、俺は何もしてない、来るな、来ないで、来ないで下さい、許して、許して下さい！」

光一が必死に誤り、2人が止まる。

「許してくれるのか？」

光一が、2人の方を見ると。

「許さな い」

「ギヤ——！！」

旅館中に光一の悲鳴が響き渡る。

こうして、光一達の温泉旅行が終わった。

光一と言う尊い犠牲を払って。

余談だが、光一がアリサ達に折檻されている時もなのは爆睡していた。

初対決（後書き）

次回「????？」お楽しみに！

タイトルコールはアンケート結果によって決まります。

祝・40000PV5000ユニーク達成

【祝・40000PV5000ユニーク達成！】

作「この小説「魔法少女リリカルなのは」転生者の軌跡」の作者のファンタジアです」

「今回、40000PV5000ユニークを達成出来ました、これも読者様のお陰です」

「まさか書き始めて1ヶ月と半月で此处まで行くとは思いませんでした」

「自分に至らない所がまだ沢山ありますが、これからも皆さんに楽しんで頂ける小説を書ける様、精一杯頑張っていくので応援宜しくお願いします」

始まる闇動き始めた混沌（前書き）

最新話投稿！今回は短いです。

【アンケートの結果発表】

1つ目の質問の結果

ライバルは一貫して出す。

2つ目の質問の結果

テストロッサ家の生存フラグON

と言う事になりました。

アンケートに答えて下さった読者様有り難うございます。

始まる闇動き始めた混沌

【????side】

其処は遥かに深く一切の光が射さない場所、人はその場所を地獄と言う、いや、地獄と言っていた。

地獄だった場所は静寂に包まれ一面黒に覆われていた、地獄には少し前まで魂や悪魔が居たが今は居ない。

其処に有るのは漆黒の魂だけ、漆黒の魂は待っていた自分が目覚める時を長い間1年……10年……1000年………1000000年と待ち続けた、ただ自分をこんな事にした神に復讐するため、ただそれだけの為に長い間待った。

「…す…だ…もう直ぐだ…アテネ」

目覚めの時は近い……

始まる闇動き始めた混沌（後書き）

次回「暴走と転生者」お楽しみに！

暴走と転生者（前書き）

お久しぶりです！

そして、申し訳御座いません！

自分勝手な理由で2カ月以上更新を止めていた事に深く反省しています。（詳しい理由は聞かないで下さい、簡単に言えば鬱とか鬱とか鬱……などの理由です）

今日から順次更新して逝きますのでよろしくお願いします！

今回リハビリを兼ねての為、読みにくい所が有るかも知れませんが温かい目で見守って下さい。

では、本編をどうぞ！

暴走と転生者

【光一 side】

温泉での初対決から数日後、俺とフェイトとの一件も解決し今では普通に喋る所まで戻った。

しかし、今度はなのはに何か有ったみたいで（俺は理由を知っているが）最近では、ボーっとする事が増えて来た、普通なら気付かない程度なんだが、親しい特にアリサやすずかなんかが気付くみたいで心配している、そんな感じの関係が暫く続くと痺れを切らせる奴が居る訳で……………問題が起きてしまう。

【光一 side】終了

《バン！》

「いい加減にしなさいよ！」

机を叩く音と共にアリサの怒鳴り声が教室内に響いた。

今は学校で休憩時間である、アリサは今さっきまで上の空だったなのはに痺れを切らせたのかなのはに詰め寄って怒り始めた。

（まあ、仕方ないよな俺もアリサの立場なら同じ事をしただろうし）

光一がそんな事を考えていると。

「私達と一緒に居ても詰まらないなら一人で居なさいよ！」

アリサはそう言ってなのはから離れて行った。

「えっと、なのはちゃんごめんね」

すずかも申し訳無さそうになのはを見て謝り、アリサに付いて行った。

「なのは良いのか？」

「……うん、仕方ない事だから」

なのはは俯きながら答えた。

（仕方ない……か、親友に話せないのはなのはにとっては辛い事なのにな）

【すずか side】

私はなのはちゃんに誤ってアリサちゃんを追いかけていた。

「アリサちゃん待って！」

私はアリサちゃんに追いつき話しかけた。

「アリサちゃん、少し言い過ぎじゃ無いかな？」

「分かってるわよ……でも、私達親友でしょ！なのになんで私達を頼ってくれないのよ……！」

アリサちゃんは目尻に涙を溜めて訴えてくる。

（ああ、やっぱりアリサちゃんは優しいな）

私は自分の気持ちを言葉にした。

「ふふ、アリサちゃんはやっぱり優しいね」

「／／／なっ！何でそうなるのよ！」

アリサの顔は真っ赤になっていた。

「だってアリサちゃんこんなにも真剣になのはちゃんの事心配してるんだもん」

「当たり前でしょ！親友なんだから」

アリサは顔を赤くさせながら、ぶっきらぼうに答えた。

「うん、親友だもんね」

そして、私もアリサちゃんに微笑んだ。

【すずか side】終了

放課後になり生徒達が帰る中、光一となのはが2人で帰っていた、何時もならアリサとすずかも一緒に帰るのだが、休憩時間の事もあり今は2人だけである。

「……………」

「……………」

2人の間に言葉は無く、有るのは重たい沈黙だけだった。

「……………なあ、なのは」

光一はこの沈黙をどうにかしようとなのはに話かけた。

「何時まで塞ぎ込む積もりだ？」

「……………ごめんね」

なのはは謝る、だが。

「なのは気付いてるか、今日お前謝ってばかりだぞ」

そう、今日なのははアリサに怒られた後謝ってばかりなのだ。

「……………ごめんね」

「はあ、又だ」

「……………ごめ「ストップだ」」

光一はなのはが謝ろうとしたのを止めた。

「……………」

「なのは、フェイトの事やジュエルシードの事を真剣に考えているのは分かる、でもな親友を心配搔けるようじゃ本末転倒だぞ」

「うん、そうだね」

「だから、なのは早くこんな事件解決してアリサ達と遊ぶう、その時はフェイトも一緒に」

「光くん…うん！」

なのはは光一の言葉に励まされたのか少しだけ明るくなった。

その後、光一となのははそれぞれの家に一度帰った。

神崎家光一の部屋

「ふう、一樣なのはも元気になったし良しとしますか」

などと光一は独り言を言っていると。

（！？何だ今のは…ジュエルシード？いや、もっとどす黒い感じの…）

光一が考えていると。

「光一どうしたの？」

フェイト達が入って来た。

「なあ、今変な魔力感じなかったか？」

光一が今感じた魔力に付いて聞くと。

「えっ？何も感じなかったよ」

フェイトは何も感じなかったと答えた。

（どう言う事だ？）

「ユーノ達は？」

「ううん、何も感じなかったけど」

「あたしも」

「マスター私も何も感じませんでしたけど」

3人も何も感じなかったと答えた。

（なら、あれは何だったんだ）

「ねえ、光一疲れてるんじゃないの？」

ユーノが心配そうに聞いてくる。

「いや、疲れては無いと思う」

「なら、気のせいだよ」

アルフが能天気につてくる。

「そうかも知れないな」

結局光一は気のせいって事にして話を終わらせたが、やっぱり気になっていた。

（気のせいだと良いんだけどな…）

光一はその時嫌な予感がしていた。

その後、なのはとユーノ、フェイトとアルフ、光一とリニスと3つのチームに別れてジュエルシードを探していた。

【光一 side】

「見つからないな、リニスはどうか？」

俺がリニスに聞くと。

「こっちも何の反応も有りません」

正直お手上げだった。

「なあ、リニス？」

「何ですかマスター？」

「なのはとフェイト友達に馴れると思うか？」

「唐突に脈絡も無い質問ですね、そうですね……分かりません」

俺は驚いた、リニスからそんな返事が帰ってくるとは思ってなかった

たからだ、リニスなら「馴れ無いと思う」とか「馴れ無いと思う」な
どきっぱりと答えると思ったからだ。

「どうしてそう思ったんだ？」

「今までのフェイトなら「馴れ無い」と答えたと思います、ですが
今は違うマスターやなのはさんと過ごす内にちよつとでは有ります
がフェイトが変わってきています、もしかしたらフェイトが良い意
味で変わるかもしれない、だから分らないと答えました！変です
か？」

俺は嬉しかった、長い間フェイトと一緒に居たリニスからフェイト
が変わったと聞いたからだ、だから俺は。

「あはは、変じゃないよ」

笑った。

【光—side】終了

そして、暫くしてジュエルシードの反応が無かった為、今日は帰ろ
うとした時。

（（！？））

2人はジュエルシードの反応をキャッチした。

2人がその場所に向かうと、フェイトが暴走したジュエルシードを
止めている途中だった。

「フェイト！」

光一はフェイトに近付こうとしたが。

「くっ！」

暴走したジュエルシードの性で近付けない。

光一が動けないで居るとフェイトが飛ばされて来た、フェイト1人の力ではどうする事も出来ない程ジュエルシードは暴走していた。

「暴走を何とかしないと大変な事になる！」

ユーノが顔を真つ青にしていた。

「仕方ないユーノ！ジュエルシードを破壊するが良いか？」

光一がユーノに聞く。

「構わないけど、無理だよ！」

「やってみないと分からないだろ！」

光一はそう言ってイージスを構えた。

「行くぞイージス！モードバスター！」

「了解しましたマスター」

そう言っでイージスは盾から杖になった。

「まずは、アクセル！」

光一は自身に強化魔法を使った。

「限界まで魔力をチャージしろ！」

光一は魔力をチャージし始めた、そして魔力が限界まで溜まると。

「貫け！ストライクバスター！！」

光一のアクセル+限界までチャージされたストライクバスターがジュエルシールドに当たった瞬間轟音が響きジュエルシールドが砕け……無かった、しかしジュエルシールドにひびが入り暴走が止まった。

「……………」

「……………砕けませんでしたね」

「……………いい良いだろ！…別に止まったんだし」

光一は真っ赤になりながら答えた、しかしイージスは。

「さっき砕くと大見得切ったくせにひび入れるだけですか、恥ずかしい」

「……………」

光一は更に真っ赤になった。

光一は暫くイージスにいじられた後フェイトやなのはの回復を行い帰ろうとしていた。

(!?)

光一が家に居た時に感知したどす黒い魔力を再び感知し周りを見渡した。

その時なのは達を見ると全員の顔が強張っていた、どうやら全員が今回は感知したらしい。

「何この感じ、怖い」

なのはが体を抱き震えていた、他にもフェイトやユーノアルフも同様に震えていた、リニスは震えてはいないが苦しそうにしていた。

《ズン!!》

更に魔力が強くなり等々なのはやユーノが膝を着いた。

「くっ！何処から！」

光一が元凶を探ろうと周りを見渡していると。

《ピシッ!》

まるで、ガラスにひびが入る様な音がした。

《ピシッピシピシピシピシピシ》

その音はどんどん大きくなっていき、全員がその音の方を向くと。

《ピシッ!》

空間にひびが入っていた。

そして、その空間が。

《パリーーーーン!!》

割れた。

「なっ!? 何だよアレ…… リンスアレ何なんだ?」

「知りません! 私も空間が割れるなんて聞いた事有りません!」

リンスも知らない事だった。

光一達が目の前の現象に驚いていると。

目の前の割れた空間から何かが出てきた、始めは何が出てきたのか分からなかったが直ぐに分かったそれは手だった、しかしそれは余りに変だった、何故ならその手は黒くまるで影の様な手だったからだ。

その後もう片方の手が出てきて、そして体が出てきた瞬間。
「ひっ!」

光一以外の全員が僅かな悲鳴を漏らした。

悲鳴を漏らした後全員の顔が恐怖に染まった。

全員がその存在に明確なイメージを連想させた。

死

「あつあああああ…嫌、イヤ、いやーーーー！」

光一以外の全員が、その存在に対し悲鳴を上げた。

そしてその存在は笑いながら呟いた

「久しぶりだな、兄弟」と……………

暴走と転生者（後書き）

次回「動き始めた時間」お楽しみに！

動き始めた時間（前書き）

最新話投稿！

楽しんで頂ければ幸いです

動き始めた時間

【光一 side】

初めに【ソレ】を見た瞬間感じたのは、恐怖では無く懐かしさだった、まるで、暫く会っていない家族や友人と再開するような感じだ。可笑しい話だろう？だって俺は【ソレ】と会った事も話した事も無いのに懐かしさを感じているんだから。

それに、なんとなく分かってしまった【ソレ】が俺と同じ存在なのだ。

だから、分かってしまった停まっていた【俺】と【ソレ】との時間が動き始めたのだと……………

【光一 side】終了

「何なの、アレ！」

「怖いよ！」

なのはとフェイトは【ソレ】に恐怖して震え、ユーノは気絶しアルフとリニスは元々の動物の本能からか、警戒していた。

「……………」

そんな中、光一一人だけが【ソレ】を無言で見上げていた。そして、【ソレ】も周りを見渡した後、光一を見ていた。

「……………」

「……………」

長い間沈黙は続き、終わらないと思えた沈黙は、【ソレ】によって破られた。

「……………」 オイ、兄弟貴様の名は何と言う？

（兄弟！？何を言っているのこの化け物は）

（光くんが、あの黒い化け物と兄弟！？）

リニスとなのはが信じられない顔をする。

「貴方みたいな化け物が光一と兄弟、バカ言わないで！」

フェイトが怖いながら精一杯の勇気を込めて言う。

「貴様は黙っている！」

「ヒッ！！」

しかし【ソレ】は光一以外に興味が無いようでフェイトの発言を許さなかった。

「……………」 神崎 光一だ」

光一は長い沈黙の後、自身の名前を名乗った。

「そうか、光一と言うのか」

「俺の名前を知ってどうする気だ？」

「なに、兄弟の名を知って可笑しい事は無いだろ？」

「さっきからお前は兄弟と言っているが、何の事だ？」

光一が【ソレ】に質問すると。

「オイオイ、隠すなよ光一、気付いているんだろ、それを証拠に感じているんじゃないか……懐かしいと」

「っ！」

「ハハハ、やっぱりか？正解か？」

「お…お前は…何が言いたいん…だ？」

光一は声を振り絞って聞く。

「まあ、今ここで答えてやっても言いが………」

【ソレ】は暫く考えて、何かを閃いたようで。

「やっぱり止めた！教えてあげない！」

「なっ！」

光一は信じらんないと言った顔をする。

「でもまあ、ヒント位は上げようかな」

「ヒント？」

「そう、ヒント！それ位ならくれてやるよ！」

「アンタふざけてるのかい！？」

「そうですマスター、あんな化け物の言うことなんかには耳を傾けてはいけません！」

アルフとリニスが光一に止めるように言うが。

「駄犬と駄猫は黙ってる！」

「「なっ！？」」

「俺は、光一と話しているんだ横から口を出すな！」

「「くっ！」」

2人は【ソレ】の威圧感に圧倒され喋る事が出来なくなってしまった。

「でっ、ヒントだが……………アテネ」

「っ！？…アテネだと」

（アテネ？）

（アテネって誰だろう？）

フェイトとなのはは【ソレ】が言ったアテネが気になった。

「なんで、お前がアテネを知っている！答えろ！」

「答える訳無いだろ、これはヒント何だから」

「な、なら！答えて貰うまでだ！」

光一はイージスを構え、【ソレ】に向かって行った。

「光くん！」

「「光一！」」

「マスター！」

4人は光一が【ソレ】に向かって行ったのを止めようとしたが、光一は既に【ソレ】の懷に居た、そして、光一はイージスを振り落とした。

全員、光一が【ソレ】を切ったと思った、何故なら光一がイージスを振り落とした時【ソレ】は全く反応出来ていなかったからだ。

光一自身、【ソレ】を切ったと思った、確かな感触が有ったからだ
.....だが現実はそんなに甘く無かった。

「あああああ.....」

「う…嘘…そんな…」

光一達は信じられない光景を見た、光一のイージスは確かに【ソレ】を切り裂いていた、しかし光一が切り裂いて場所から手が生えて光一のイージスを掴んでいた。

「痛かったぜ、兄弟！」

「なっ！」

光一は驚いた、【ソレ】が何事も無かった様に喋っているからだ。

「お前何なんだ！？」

「俺か？俺はお前の兄弟だよ」

「ふざけるな！」

「ふざけてなんか無いさ、俺は真面目だぜ」

「ただ、まあ、まだ目覚めて間もないせいで、不完全ではあるがな」

「不完全？」

「そつだ不完全、だから俺が完全になつた時お前は気付くさ俺の正体に、いや、気付かない筈が無い」

【ソレ】はそう言って光一を突き飛ばし、又穴に戻り始めた。

「待て！」

光一は【ソレ】を追おうと手を伸ばしたが、穴から伸びてきた手によって阻まれた。

「オイ、兄弟！」

【ソレ】は振り向き、光一に語りかけた。

「俺が不完全であると同時にお前も不完全だ、だから完全になれ、俺が完全と成れる様に！」

「何を言ってるんだ！」

「まだ分からなくて良い、いつかお前は気付くさ、俺の存在にそして俺の言葉の意味に！」

「……………」

光一は喋る事が出来なかった。

「なんたってお前は、俺の兄弟なんだからな」

そう言って【ソレ】は光一達の前から姿を消した。

光一は【ソレ】が姿を消した後、なのは達の所に戻ったが。

「……………」

あんな事が有った為全員喋る事が出来なかった。

しかし、そんな沈黙を破ったのは、光一だった。

「……………みんな、聞いて欲しい事が有るんだ」

全員が光一の方を向く。

「どうしたの光くん？」

「実は俺みんなに話ないといけない事が有るんだ」

「話さないといけないこと？」

フェイトが首を傾げながら聞いてくる。

「…ああ、話さないといけないこと」

「何ですかマスター？」

「俺は、みんなに秘密にしている事が有るんだ」

「秘密にしている事？」

ユーノが質問するが、どうやらユーノは目を覚ました様だった。

「この事は俺の両親も知らない事なんだ」

「別に、親に話せない秘密位誰にでも有るだろ、例えば恥ずかしい出来事とか」

アルフがフォローしてくる

しかし

「そんな事じゃ無いんだ!!」

「「「「「.....「「「「「」

光一の剣幕にみんな黙ってしまった。

「マスターの秘密って何ですか？」

「俺の出生についての秘密だ」

「ちょっと待って、親の知らない出生の秘密って何？」

ユーノは訳が分からない様で混乱していた。

「ユーノ落ち着け」

光一がユーノを落ち着かせ話を戻した。

「みんなもユーノみたいに混乱していると思うでも、聞いて欲しい」

光一が秘密を明かそうとした時。

「待って下さいマスター」

リニスが割って入った。

「何だリニス？」

「マスターは何故今秘密を話そうと思ったのですか？それもマスターの御両親も知らない様な秘密を私達に」

「それは……」

「まさか、あの化け物に関係しているのですか？」

「……………」

「どうやら正解のようですね……マスター！」

「…何だ」

「マスターがああの化け物に何を言われたか知りませんし知ろうとも思いませんが、自棄にならないで下さい！」

「自棄？」

「はい、自棄です」

「俺は自棄なんかになっていない！」

光一は否定するが。

「なってるよ！」

「なのは？」

光一を否定したのは、なのはだった。

「なってるよ、だって、光くん辛そうな顔してるもん」

「俺は…」

「マスター、辛い話さないで下さい」

「光くんが覚悟出来るまで待ってるから」

「リニス…なのは…」

光一が暫く俯き、そして。

「ありがとう、俺を叱ってくれて」

「うん」

「これで覚悟が決まった、やっぱり話すよ」

「マスター!？」

「光一だって今？」

「やっぱり話しておきたいんだ、みんなに隠し事をしなく無いから」

「分かりました、私はマスターの指示に従います」

「私も良いよ」

「あたしも別に構わないよ」

「わ、私も光一の秘密を知りたい」

「僕も良いよ」

「ありがとうみんな」

「実は、俺は……………」

「転生者なんだ」

「……………えっ？」「……………」

動き始めた時間（後書き）

次回「管理局」お楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8590p/>

魔法少女リリカルなのは～転生者の軌跡～

2011年5月29日06時26分発行